

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）

平成27年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト
「未病に取り組む多世代共創社会の
形成と有効性検証」

渡辺 賢治

（慶應義塾大学環境情報学部・教授）

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施項目・内容	2
2 - 3. 主な結果	2
3. 研究開発実施の具体的内容	3
3 - 1. 研究開発目標	3
3 - 2. ロジックモデル	4
3 - 3. 実施方法・実施内容	4
3 - 4. 研究開発結果・成果	7
3 - 5. 会議等の活動	40
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	43
5. 研究開発実施体制	43
6. 研究開発実施者	45
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	47
7 - 1. ワークショップ等	47
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	47
7 - 3. 論文発表	48
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	48
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	48
7 - 6. 特許出願	48

1. 研究開発プロジェクト名

未病に取り組む多世代共創社会の形成と有効性検証

2. 研究開発実施の要約

2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、多世代が協働し、住民が生涯にわたって「未病対策」に取り組むまちづくりプラットフォームを神奈川県西地域（湯河原町）をフィールドとして開発し、未病に取り組む多世代コミュニティを全国展開することが中・長期的目標である。

こうした多世代コミュニティが未病に対してどのように効果をもたらすのかを検証するために、健康状態をモニターする指標の作成とともに、多世代ソーシャルキャピタル指標、生きがい指標などの新規指標を作成し、多世代コミュニティが健康状態にどのような効果をもたらすのかを検証するモデルを作成することを期間内の目標とする。

2 - 2. 実施項目・内容

「未病」とは、ライフロングに生まれてから死に至るまでの間、健康状態から病気、介護に至るといった幅広い概念である。よって「未病対策」は疾病の「予防医療」や健康状態を向上させる「健康増進」に止まらず、病気や要介護状態となった後の進展予防をも含む概念である。本プロジェクトは多世代が協働して未病対策を行うことを目標にしている。

平成27年度は未病概念の浸透、多世代地域コミュニティの形成、地域ネットワーク形成の条件調査、要介護度進展予防のための調査、地域資源である温泉を活用した変形性膝関節症の悪化予防について検討を行った。

また、本プロジェクトの評価をするための、指標作成を行った。

2 - 3. 主な結果

まずは本プロジェクトの普及・浸透を図るために、ポスターを各所に貼ってもらったことに加え、何故未病が必要なのかを行政・区長に理解してもらうことから開始した。今後は広報等で幅広く浸透させることにした。

多世代コミュニティ形成のために、1) ふるさと絵屏風プロジェクト、2) 多世代の居場所づくり、3) 演劇ワークショップを進めた。そこに参加する住民の変化について自覚的および他覚的調査を行った。

要介護度進展予防は、すでに要介護を受けている住民が、家族と同居か独居か、施設入居か否かにより、どのような影響を受けるのかをさまざまな観点から調査を行い、社会的要因が要介護者にどのような身体的・精神的制約を加えているのかについて明らかにした。

地域資源である温泉を用いた未病対策として温泉泥（ファンゴ）を用いて膝の痛みが取れるかどうかを検討中である。

多世代の評価指標としては、他人との関係性と精神的安定性について、湯河原町住民ならびに地域小中学生を対象に解析を行い、同世代および世代を超えた関係がよりあるの方が生きがいがあることを明らかになった。

3. 研究開発実施の具体的内容

3 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトのリサーチ・クエスチョンは以下の通りである。

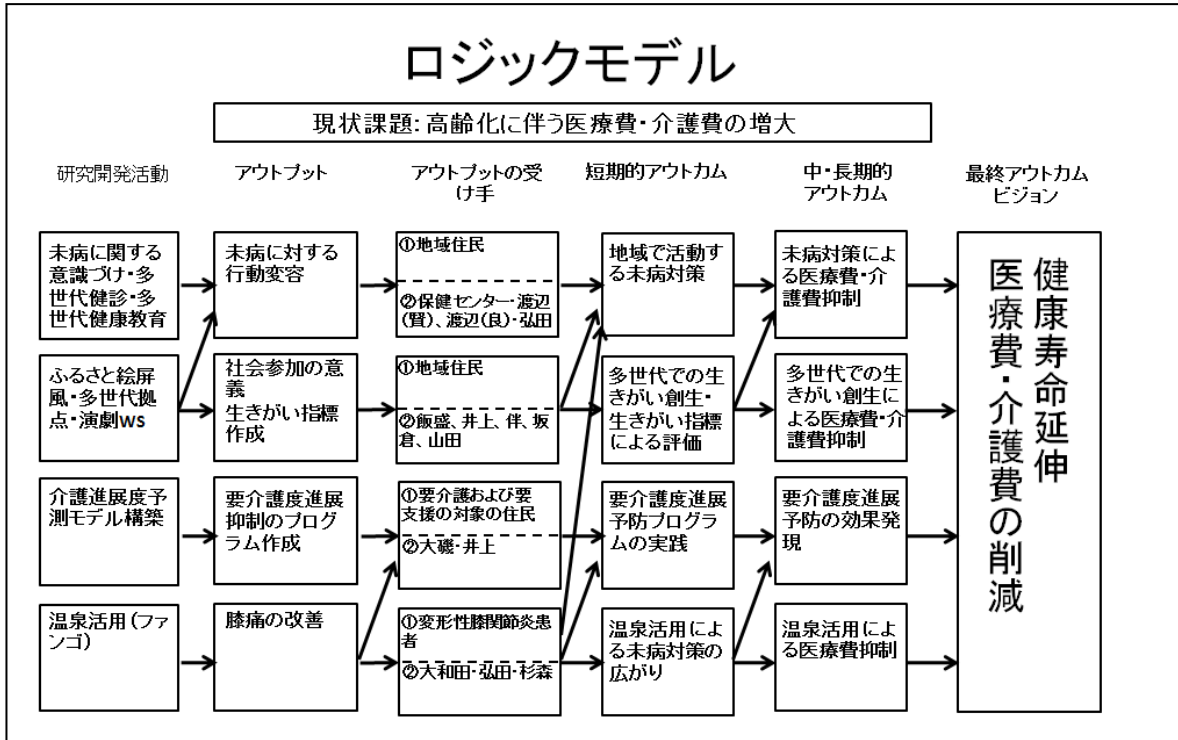
1. 持続可能な社会の実現にとって、どのような多世代的なアプローチが有効か？どのような問題に何故有効なのか？
2. 特に若い世代（子供、学生、若年単身者、子育て世代等）にとって、多世代共創的活動に参加するためのインセンティブにはどのようなものが考えられるか？
3. 持続可能な社会の実現にとって効果があると思われる多世代共創的活動の中で、一部の世代に十分なインセンティブがないことが障壁となっている場合、参加を促すために、どのような制度設計が考えられるか？
4. 多世代共創的活動は人々の意識にどのような変化をもたらすか？そのような意識変化は持続可能な社会の実現にとってどのような含意があるか？
5. 多世代関係が生きがい・レジリエンス・心身の健康・行動に及ぼす影響
6. 多世代共創の「場」や「活動」が、個人や人々の関係性、地域に与える影響

目標

本プロジェクトでは、多世代が協働し、住民が生涯にわたって「未病対策」に取り組むまちづくりプラットフォームを神奈川県の県西地域（湯河原町）をフィールドとして開発し、未病に取り組む多世代コミュニティを全国展開することが中・長期的目標である。

こうした多世代コミュニティが未病に対してどのように効果をもたらすのかを検証するために、健康状態をモニターする指標の作成とともに、多世代ソーシャルキャピタル指標、生きがい指標などの新規指標を作成し、多世代コミュニティが健康状態にどのような効果をもたらすのかを検証するモデルを作成することを期間内の目標とする。

3 - 2. ロジックモデル



3 - 3. 実施方法・実施内容

1) 未病概念の構築と普及

本プロジェクトの最も重要なポイントはプロジェクト期間が終了しても、住民主体で持続する「未病に取り組むコミュニティ」の創生である。よってまずは地域住民が「未病に取り組むコミュニティ」を自ら推進して持続可能社会を築く、という強い意志が必要である。

行政である町役場との連携を強めるとともに、住民の理解を得るよう働きかけを行った。

2) 未病チェックシートを用いたライフログアプリ開発

ライフログアプリを作成して日々の生活の支援をする計画であったが、平成27年度は完成させることができなかった。

3) 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成

平成27年度からは、プロジェクトチームに新たに多世代共創コミュニティづくりに取り組んできた慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所の坂倉杏介と滋賀県立大学 地域共生センターの上田洋平が参画した。

坂倉が推進してきた「芝の家」<http://www.shibanoie.net/about/>は多世代が集う新たなコミュニティの場として注目を集めているが、こうした「多世代交流拠点」を町の学区(小学校が3つある)ごとに設置することを最終目的とし、平成27年度はまず1つ拠点を

つくることを目標とした。

また、上田が推進する心象絵図法によるふるさと絵屏風は住民参加によるその制作過程と併せて多世代をつなぐツールとして非常に期待される。これを各小学校の学区で展開し、坂倉の展開するつどいの場と連携した形で多世代コミュニティを形成することを目標に活動を行った。

4) 多世代コミュニティ形成のアプリ活用

平成26年度に「活動を支援すること」「生きがい創生をすること」を目的に多世代コミュニティ形成のアプリ「くちコミュ ～湯河原～」を開発した。課題はWifiが十分行き届かない地域があること、高齢者が使ってくれるか、という点にある。

管理者は当座慶應義塾大学の学生が行っているが、積極的に多世代がつながるためには、アプリ利用者を拡大するとともに、各世代のニーズを掘り起こし、世代間の交流を盛んにする仕掛けが必要であるため、地域でアプリ管理をしてくれる人を探した。

5) 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成

平成26年度の調査で、地域ボランティアは400名いることが分かった。観光、環境が主な活動であるが、未病に取り組む必要があると判断したら、それに取り組むボランティアは数多く参加してくれると期待できる。町の既存の仕組みを利用しながら、住民リーダー・地域ボランティア育成を行うために、演劇ワークショップの手法を用いて多世代の住民による学び合いワークショップを開催し、未病対策意識を高めると同時に地域リーダーを育成した。

6) 医療福祉介護機関ネットワークの構築

未病対策には地域の医療専門職との連携が不可欠である。医療専門職は制度上、医師・薬剤師・保健師・看護師・介護士・など職種の縦割りの中でお互いの交流が必ずしも密ではない。一方未病はライフロングの概念であり、地域包括ケアシステムの構築を見据えても、専門職ネットワークは不可欠である。平成26年度の調査結果から見えてきたものは医療と介護、予防がそれぞれ分離していて連携が極めて薄いことであった。特に介護分野は専門保健師が1名しかおらず、介護予防も含めて65歳以上人口の健康情報を収集する保健師が1名しかいない。こうした現状を共有しながら医療福祉介護機関ネットワークを構築し、町で取り組む体制を整えるため、まず、住民の受けている身近な医療（プライマリ・ケア）と未病関連行動（予防医療など）、ヘルスリテラシー、多世代コミュニティ参加の状況に関して質問紙調査を行い、これらの相関および関連要因についての検討を行った。

質問紙調査は、住民基本台帳から無作為に抽出した20～80歳の湯河原町住民2000人を対象に郵送法にて行った。732名（回収割合36.6%）から回答を得た。質問紙は、多世代交流活動、生きがい、予防医療行動、生活習慣、ヘルスリテラシー、プライマリ・ケアの質について尋ねる項目で構成した。この調査により、多世代交流活動を評価する尺度の開発、多世代交流と生きがいとの関連、プライマリ・ケアの質とヘルスリテラシーおよび予防医療行動について検討を行った。

7) 要介護度進展の予測および介入・評価

平成26年度に施行した「要介護度と社会的因子・精神的因子との因果関係」調査結果が

ら要介護度進展予測のための社会的ならびに精神的危険因子の分析を行う。それらの解析により、要介護度進展が懸念される集団について以下の介入を行う。

- 1) デイケアにおいて積極的に身体活動を行う群と在宅における生活支援のみを受ける群
- 2) デイケアにおいて積極的に認知症予防活動を行う群と在宅における生活支援のみを受ける群

上記に対し、それぞれ身体形態・機能および認知機能の評価を定期的に行う。

身体形態・機能に関しては要支援2から要介護に移行する期間で判断し、認知機能に関してはMMSEの得点が22～26点程度の軽度認知障害疑いの高齢者を対象として、認知症への進行速度を比較検討した。

8) 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発

湯河原を含む神奈川県西地域は「未病癒しの里」として70の施設を認定している。また「県西ウォーキングガイドで75のハイキングコースを指定したが、そのうちの6が湯河原町内に存在する。

この情報をくちコミュ湯河原に搭載する。

9) 温泉活用による未病への効能の科学的データ収集と解析

大和田がイタリアから技術導入し、日本向けにアレンジした温泉泥「BioFango」の臨床試験を、高知大学とともに平成25年度は富山県で、平成26年度は湯河原で実施してきた。膝・腰痛のある高齢女性30人にBioFango施術を週3回、非介入期間30日を挟んで再度週3回施術を実施すると、介入期間の前後では、唾液アミラーゼ活性の低下、30秒立ち上がり回数増加とTimed up and Goテストの短縮、痛みの自覚症状の劇的改善が認められ、強いストレス軽減（リラックス効果）および痛み軽減による身体バランス機能の改善が明らかとなった（学術誌投稿中）。また、非介入30日後においても、効果が有意な悪化をしていないことがわかった。本年度の課題として、長期間のBioFango介入による、1) 寝たきりにつながる転倒の予防ができることを証明すること（究極的には、介護保険料負担が減ること）、2) メンタル面での悪化を防ぐ（うつ尺度の低下を防ぐ）効果があることを証明することを目標に研究計画を立て、慶應義塾大学・高知大学・東邦大学の倫理委員会に申請した。

10) 多世代共創コミュニティ指標作成

本プロジェクト推進のためには、多世代共創コミュニティの形成をどのように評価するかが重要なポイントとなる。近年「きれやすい」若者や高齢者が問題となっているが、レジリエンスや受援力が不足していることが指摘されている。核家族化が進む中、多世代共創コミュニティは親子の縦の関係でもなく、学校や会社の横の関係ではない「斜め」の関係を築くことができる。「芝の家」や「心象絵図」ではこうした「斜め」の関係を構築することは、レジリエンスや受援力を本当に高めるのかどうか、その他、多世代共創コミュニティを評価するにはどのような指標が有効であるかについて検討した。平成27年度は多世代コミュニティの効果を評価する項目を列記し、パイロットスタディを行った。

11) 未病の評価法の検討

本プロジェクトは、2-10で作成する多世代共創コミュニティの指標が「未病」にどのよ

うな影響を及ぼすのかを検証するためには、「未病」を計測する指標についても検討を要する。65歳以上については全町的に調査する「基本チェックリスト」の変化を解析することで可能である。しかし、65歳未満の層については、他の指標が必要である。特に若年者は身体的な指標よりもこころの指標が重視される。

既存の健康度チェックを検討し、幅広い年齢で現在の健康状態を測定できる指標について検討し、平成27年度中に確定する。特に2-3.で行う多世代交流拠点やふるさと絵屏風は参加した時点から多世代交流が始まるため、前後で身体健康度、こころの健康度の変化を比較する計画である。

12) 多世代共創コミュニティが未病に及ぼす効果検証のための体制作り

本プロジェクトでの一番の課題は「多世代共創コミュニティ」という社会科学的方法が「未病」という自然科学的方法をつなぐところにある。多世代コミュニティ形成には沢山の因子があり、通常自然科学的方法はかなり異なる。すなわち自然科学的方法では極力単純化したモデルにおいて、一つ一つの因子が結果にどのような影響を与えるのかを検証する手法であり、複雑系を解析する手法はまだ確立していない。

本プロジェクトは、多世代共創コミュニティに関わる様々な因子がどのように未病対策に効果があるかを検証し、他の地域でも追従できるモデルを構築しようというものである。多変量解析に加えて、マルチレベル分析やデータマイニングの手法を取り入れて解析する必要がある。プロジェクトをスタートさせる前に十分に基礎データを取らないと、プロジェクト終了時に前後比較が不可能となるため、十分に計画を立てる必要がある。

平成26年度調査で、町にある健康調査データが多々あることが分かったが、その活用をすることができれば町全体の健康指標の推移をさまざまな活動と関連してマルチレベル分析が可能となる。それらのデータ利用について町に協力を依頼し、関連施設で倫理委員会の申請を行う予定である。

3 - 4. 研究開発結果・成果

1) 未病概念の構築と普及

平成26年度の本プロジェクトの調査では、「未病」という言葉は知っている住民が多かった（106名中66%）。また、何らかの健康に留意した活動を行っている人は70%にも及んだ。その意味において、健康意識は高いと言える。

一方多世代での取り組みになると、何らかの団体に参加している住民は1割にも満たず、個々の努力はあるものの、コミュニティとして健康対策に取り組んでいるとは言い難い状況である（平成26年度報告書参照）。

最も重要なポイントはプロジェクト期間が終了しても、住民主体で持続する「未病に取り組むコミュニティ」の創生である。よってまずは地域住民が「未病に取り組むコミュニティ」を自ら推進して持続可能社会を築く、という強い意志が必要である。

平成28年3月5日に町長をはじめとした役場の関係者ならびに商工会と湯河原町内の各区分長さんに集ってもらい、われわれの活動に対する理解をお願いする機会を設けた。中には大学の研究のためにやっているだけだ、という厳しい意見も出たが、2040年には高齢化率が48%になる湯河原をいかに持続可能な町にするか、それが日本のモデルになる、ということをご理解いただき、行政、住民が一体となって地域を活性化する必要性

を確認できた。

その一方で、共働きが多く、婦人会、青年会といった自治組織に加入しない人が増えていて、地域コミュニティが崩壊しつつある現状も聞くことができた。

今後行政との話し合いの中で、さらなる浸透が必要であり、定期的に行行政・地域リーダーと情報共有し、住民対象広報媒体を通じて未病対策の啓発を持続することにした。

2) 未病チェックシートを用いたライフログアプリ開発

湯河原町の健康増進計画のための調査においても高齢者の孤立を防ぐためにも、アプリを活用した仕組みづくりが必要という結論に至っている。本プロジェクトで、くちコミュ湯河原と連動した形のライフログアプリを開発する計画である。

高齢者でも使いやすいアプリを開発していたが、計画が遅れ、平成27年度中には完成に至っていない。

3) 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成

3-1) 多世代交流拠点

多世代拠点の実現のために、まず本プロジェクトでは湯河原町の交流拠点の調査や関係者へのヒアリングを行った。並行して教育委員会で行われている「子どもフォーラム」へ参加し、湯河原町の小・中学生の想いを確認した。こうしたなかから、多世代拠点を多世代の共創でつくり出すというアプローチがもっとも本プロジェクトにふさわしく、そのためにも子どもがそのプロセスに参加できることが重要ではないかと考えた。こうして、「ゆがわらっことつくる多世代の居場所」をコンセプトに多世代共創で拠点をつくっていくワークショップを開催した。

11月から1月まで計4回、子どもから高齢者までが参加するワークショップを「Retreat Works 梵～SOYOGI～」(湯河原町土肥)で開催した。「本当に安心できる居場所とは？」というテーマで、これからつくる居場所への想いやイメージを共有し、「芝の家」(東京都港区)を見学、その体験にもとづいて、レゴなどを用いて拠点はどのような空間なのかをデザインした。最終回では、拠点空間のイメージから、そこでどのようなことが起こるとよいか、ストーリーをつくりみんなで演じることで、拠点像を共有した。各ワークショップの様子をまとめた資料を以下に示す。

さらに2月からの第二フェーズのワークショップ(全2回)では、具体的な拠点候補地を見学し、設計ワークショップを行った。ワークショップの参加者数は、述べ66人で、小学生15人、大学生29人、30歳代5人、40歳代12人、50歳代4人、70歳代1人であった。

本年度は、拠点の候補地、拠点となる物件のリノベーションデザインの基本計画、改装ワークショップの具体的な進め方を決定した。こうした活動のなかで、主体的に居場所づくりを行う子どもたち、多様な立場の大人・高齢者とのネットワークが形成され、また各小学校で配布したワークショップのチラシなどを通じて、次第にプロジェクトの認知度が高まっている。拠点やその設計だけではなく、共創の前提となる協力者を増やすことができたことも本年度の大きな成果である。

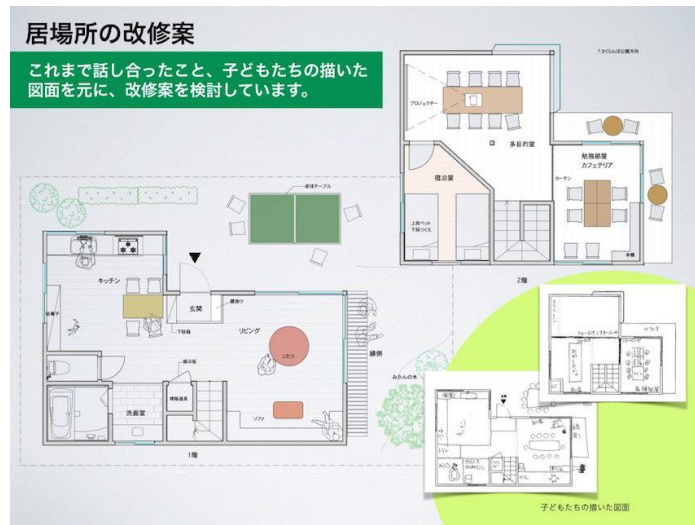


図1. 参加者と作成した設計案

3-2) 絵屏風プロジェクト

プロジェクトの経過

絵屏風プロジェクトは、研究開発のフィールドである湯河原町において、地域コミュニティに関わる人びとの多様な参画により、地域の生活誌を一枚の絵画作品として制作する活動を展開し、その活動を通じて持続可能な多世代共創社会の形成に資する知見を得るとともに、その進捗過程において実際に対象地域内の多世代のつながりを構築し多世代共創のための場や環境をデザインすることを目指す実践的プロジェクトである。

「心象図法」と呼ばれる手法を採用し、その手順に沿って進めており、概ね以下の段階を踏んで進められる。

- (1) 地域住民（とくに高齢者）を対象にした五感体験アンケート
- (2) 五感体験アンケートの結果を踏まえた聞き取り調査
- (3) 五感体験アンケート及び聞き取り結果を踏まえた絵図の制作
- (4) 制作した絵図の活用

今年度はこのうち(1)から(2)までの段階に取り組んだ。絵図制作に向けた材料集めと制作に向けた機運醸成の段階にあたる。

今年度の実施経過と概要は以下の表のとおりである(表1)。

表1. 平成27年度絵屏風プロジェクト調査・活動実施経過

時期	実施内容	対象
7月16日	絵屏風プロジェクト公開セミナー	慶應義塾大学学生及び 一般参加者
8月4日	絵屏風プロジェクト公開セミナー	
8月26日	役場担当者との連絡調整会議	地域政策課・介護課
10月6日	プロジェクト参加学生に対する調査準備講座	慶應義塾大学学生
10月13日	湯河原町内各区長・老人会長向け説明会	各区長・老人会長
10月27日	プロジェクト参加学生による研究計画発表会	慶應義塾大学学生
11月5日	区長向け説明会と五感体験アンケート実施に向けた協議	各区長

12月1日	役場担当者との連絡調整会議	地域政策課・介護課
12月11日 以降	五感体験アンケートの実施（区ごとに配布・回収。～1月初旬）	各区65歳以上住民（老人会会員）
1月19日	役場担当者との連絡調整会議	地域政策課・介護課
1月30日	絵屏風制作プロジェクト制作キックオフセミナー	湯河原町住民
2月7日	聞き取り調査プレ調査。	土肥地区老人会関係者
	RISTEX領域合宿サイトビジットにおいて紹介	領域合宿参加者
2月23日	集中聞き取り調査	各区老人会
2月24日	集中聞き取り調査	各区老人会
3月3日	集中聞き取り調査	各区老人会
3月5日	年次活動報告会	区長以下役場関係者及び各区長

今年度のプロジェクト実施内容と成果

絵図制作を通じた調査・研究の途中段階ではあるが、今年度の実践を通じて得られた成果は以下のとおりである。

（1）手法の理解と習熟のためのレクチャー及びワークショップ

湯河原町でのふるさと絵屏風制作にあたり、年度前半には絵屏風の制作手法である「心象図法」についてプロジェクト参加メンバー、とりわけ学生向けに、複数回にわたりレクチャー及びワークショップを実施した。

これは調査・研究に従事する人員の確保とその習熟を目的とするものであるが、同時に学生自身の当事者意識を涵養することを意図したのもであった。

当プロジェクトに参加する学生には、調査研究業務を支えるスタッフであると同時に、ヨソモノ、ワカモノの立場で多世代共創コミュニティに関わる成員としての役割も期待される。

地域の事情やそこでの暮らし、歴史・文化にある程度無知なヨソモノ・ワカモノの存在は、彼らが地域の中に「割って入る」ことや、地域間を「渡り歩く」ことによって、固定化し硬直した地域内の諸関係を攪拌し解きほぐし、ときに彼ら自身がコミュニティ形成やその再編にあたっての「触媒」の役割を果たすことがある。

そのため、ある地域において多世代共創コミュニティを形成するというとき、そのコミュニティの成員はもちろん当該地域の住民が中心となるであろうが、こんにちの地域社会、とりわけ年齢構成にバランスを欠くような少子高齢化の進展した地域においては、地域内に現に住まいする成員だけでなく、いま言ったようなヨソモノ・ワカモノの存在も勘定に入れる必要があると考える。

そうした意味では、当プロジェクトの展開を通じて、ヨソモノ・ワカモノとしての学生がかかわることによる地域コミュニティの側の変化を観察するばかりでなく、併せてプロジェクトにかかわることによる学生の側の意識や行動の変化を見ることによっても、多世代共創コミュニティの形成に関する様々な知見や示唆を得ることができるであろう。

以上のような観点から、当プロジェクトにおいては、地域コミュニティや地域住民とかかわるフィールドワークに参加する学生たちには、後述するように、折に触れて、心境の変化や感想の報告を求めることにした。

(2) 地元との協議に基づく推進体制及び環境の整備

10月から11月にかけて、湯河原町役場と調整のうえ、自治会、老人会向けの説明会および地域での取り組みの進め方や実施体制等に関する協議を実施し、現地での活動がスタートした。

区長はじめ地元への説明と協力依頼にあたり、町からは地域として単に未病に関する専門的な研究や調査を受け入れるということだけでなく、当プロジェクトを通して絵屏風という地域の宝物を手に入れることも目標とするというスタンスで連携・協力するという意思が示され、そうした理解の元、実施の過程そのもの、及びその成果が湯河原のまちづくりに還元・反映されるようにプロジェクトを推進していくことで一致した。

12月までに制作スケジュールや制作体制について役場関係課と協議、調整をおこない、今回プロジェクトにおいては、地元の提案に基づき、現在の中学校区にあたる範囲でそれぞれにつき1点ずつ、計2点の絵屏風を制作することが決まった。湯河原町内は10の区にわかれており、中学校区に振り分けると以下ようになる。大まかに言って奥湯河原温泉郷を含む湯河原エリアと、かつては開けた田園地帯であった区域や里山および海岸線を擁する吉浜エリアの様子をそれぞれ描くことになる。

表2. 絵屏風に描く範囲とその内訳

湯河原エリア (5区)	温泉場 宮上 宮下 城堀 門川
吉浜エリア (5区)	鍛冶屋 中央 吉浜 川堀 福浦

ふるさと絵屏風の制作は、通常では地域の歴史文化の継承や地域づくりのために地域の側の発意によってその取り組みが開始される場合が多く、その場合、制作に向けた体制づくりや進捗管理、また絵図完成後の活用も地域住民主導で進められ、その過程で新たな推進組織が形成されることになるが、今回は研究グループ側からの実施提案であり、また、対象地域が複数の区及び団体にまたがるため、立ち上げ時点からしばらくは研究グループと町の主導でプロジェクトを進め、絵図制作等の活動を通じたつながりのなかから地元住民を中心とした推進組織や絵屏風を核としたコミュニティが形成されることを俟ち、あるいはそれを促す形で取り組みを展開することにした。

絵図制作にあたって決定的に重要な人員として実際に絵を描く人いわゆる「絵師」の存在が欠かせない。この絵師に関して、町の紹介・仲介により地元湯河原の美術協会が会長以下幅広く協力してくれることになった。早い段階で絵師が確定し、かつそれが地元住民であることは実際の制作作業の進捗にとっても意義は大きい。また、美術協会という住民団体との組織的な連携も可能になることから、絵屏風づくりをきっかけとしたコミュニティ形成やまちづくりへの活用への展開を考える上でも意義ある参加・協力と言える。

絵画制作は公開または半公開の場で行うことにより、プロジェクトへの住民の関心を喚起し、制作される絵図により多くの住民意見を反映する機会になるとともに、まちづくりへの展開を担う当事者として住民がプロジェクトに参画するきっかけを提供する。絵図制作の作業は平成28年度の9月頃から本格化するが、この制作の場所として、湯河原町教育センターの一室を活用することが町から提案された。かつての学校施設を再利用した建物であり、町の教育委員会やシルバー人材センターも入居する複合施設であり、また、湯河原の子どもフォーラムの拠点施設でもあって、多世代共創というテーマで取り組む絵図制作の拠点としては好条件を備えた場所である。

(3) 五感体験アンケートの実施

2015年12月中旬～2016年1月初旬にかけて、各区老人会を通じて「五感体験アンケート」を実施。2016年1月16日時点で102名（男性33名、女性50名、不明1名）から677件の回答を得た。区長・老人会長対象に事前に行ったアンケートの回答18名分（男性17名、女性1名）、99件を加えると102名から776件の五感体験データが集まった。

当プロジェクトの主目的は地域の暮らしや歴史・文化に関する民俗・生活学的な把握あるいは郷土史的な記述にあるのではなく、絵屏風制作を通じた多世代共創コミュニティ形成のモデル構築及びそのために必要な知見の獲得にあるので、アンケートの回答に見られるような、地域の生活誌に関わる個別のデータ自体が成果として決定的に重要なわけではないけれども、以下に今回実施したアンケートによって集められた五感体験データのうち、ある集落の事例を紹介する（表3）。

例えば、五感体験アンケートの回答にみられるような、身近な地域の自然環境とのかかわりの深さ多様さと、そうしたかかわりの豊かさに根差した人々の認識やまなざしの深さといったものは、一般的に言って若い世代になるほど薄く一様なものになりつつあるのではないだろうか。このような、地域における自然を含む環境や場に対する認識や知見を相続し、また世代間の違いとかギャップを理解しておくことは、今後新たにまちづくりを進めるためにも重要であると考えられる。実際、五感体験アンケートの回答に書かれた事物のなかには、それ自体地域資源となりうるようなものも数多く認められる。

ところで、ある人間の集団がコミュニティを形成しそれを維持するに際しては、物理的な相互依存関係や経済的利害関係の他に、そのコミュニティの成員同士の間には何らかの共通体験や共通の記憶が共有されていることが重要であると考えられる。

ある共同体において共通の記憶として語られる歴史や神話は政治的に選択された過去の事象が事後的に編み直された物語として成立したものが、そのコミュニティの成員及びコミュニティそのもののアイデンティティを形成しあるいは補強し、コミュニティの紐帯としての役割を果たしつつ、一方ではそれを共有しない者を疎外し排除するものとして働く。

心象図法は歴史的体験や記憶を共有することのこのような働きを活用、あるいは逆手にとって、地域の多様な住民が役割分担しながらともに絵画制作をすることを通じて、また、制作した絵図を装置として、地域の暮らしの文脈と結びついたコミュニティの形成・再編や、コミュニティのアイデンティティ形成・確認、あるいは多世代の住民のつながりの構築を目論むものである。この際の眼目は、すでに完成された歴史や郷土史、いわば出来合いの物語を教科書的に読み合わせたり、教条的ななぞるかたちで共有するのではなく、地域にかかわる人々個々の経験の原点としての、生身の五感体験一つひとつに立ち返り、持ち寄られたその五感体験を素材として、地域の生活誌、暮らしの物語を再構築しようとするのである。

政治的・思想信条的なバイアスからできるだけ自由に、また地域の歴史・文化に関する個々人の教養の有無やその度合いによらず、五感体験という、誰しにも与えられうる生身の体験を基点として語り合えばこそ、共感を通じた理解と交通が可能になるのではないか。そのような共感の語りが可能となる場の存在と多世代共創コミュニティ形成とのかかわりといったことについても、今後何らかの形で検証したい。

表3. 五感体験アンケートの質問項目と回答の一例（一部抜粋）

【設問】

1. 今も目に浮かぶ風景、なつかしく印象深い光景について教えてください。
2. なつかしい音、印象深く耳に残っている音について教えてください。
3. 印象深いにおい、思い出の臭いや香りについて教えてください。
4. 手足によみがえるような感触、肌ざわり、暑さ寒さ、熱さ冷たさ、痛さの体験などについて教えてください。
5. 思い出の味、印象深い味、味覚体験について教えてください。

【回答】自由記述式

- 地引き網で一度イワシが大量に入り網が破れものすごい量のイワシが海岸にあがり畑の肥料にとイワシをバケツで家に何度も運び1 m位の高さに積みあげた事があります。
- 四角いすだれに「はんば」が干されていた。
- 夏になると海の無い学校の生徒が林間学校で吉浜海岸に良く泳ぎに来ていた。
- ハマグリ拾い。海が大荒れした後よくハマグリが海岸に打ち上げられ拾いに行った。
- 寒い雪の降った朝の砂浜によくマトウダイとか言って熱帯魚のエンゼルフィッシュに似た魚が海岸に打ちあげられた。海水が冷え砂浜近くに来て波で打ち上げられたようだ。
- 今のエスポート付近の磯浜に小型の戦闘機が不時着して見に行ったが、小さくキャシャな飛行機だった。
- 海に近い所で育ったせいか、海の潮のにおいがすると安心する。
- 海に潜ると上はあたたかいが深くなる程冷たくなる。
- 吉浜海岸に作られた” どんどん焼き”。今では一つになっているが昔は三つあった。それぞれの地区が競い合あって立派なものを作っていた。その燃え上がる様は圧巻。
- どんどん焼きの燃え盛る火の音と竹の割れる大きな音。
- 浜で「どんど焼き」の竹飾りの燃え上がる火勢のすごい音
- 浜辺を散歩していた時に、釣り竿で糸の先に魚の頭を網の様な物に入れ沖に投げている人がいたので、何を釣っているのか尋ねたら「わたりガニ」をお知えられ沢山くれた。家に持ち帰り「味噌汁」に入れた。食べた。おいしい味だった。
- 早朝、海岸の波打ち際に打ち上げられた小魚をかごで拾った
- 日中の砂浜では波が引くのをまってハマグリが砂の中に潜るのを見つけて拾った
- 眼前にこんもりとした森があった、夏の海岸での花火がその森の上に大きく見えた。
- 波の音が良く聞こえた
- 食糧難の頃新崎川でウナギを初めて釣りその夜のカバヤキが美味しかった。
- 新崎川河口周辺で潮が引くと良くモクズガニを取りに行きはさまれるととても痛かった。
- 一面の黄金の稲穂の向うも山々とまっかな夕日！！
- みかん山のオレンジ
- 見事なみかんがなっている風景がとてもすばらしく感じました。
- 畑にワナをしかけヒヨドリを取り羽根をむしり焼鳥にした時の焼鳥の味。
- 春、菜種のみを取ったあと、残った基の各田ボのパチパチと黒いケムリをあげ燃える音。
- 田んぼのカエルのなき声。（田植え前）。
- 夏の田んぼのヌクモリ。（水アビ時）。

- 馬車は細い道、見事な青田の中を静かに走る
- 青田の中を姉と二人で馬車に乗ったとき、なんともいえない優しい匂いがした
- 涼虫のリーンリーンと鳴く声
- 大波が打ち砕けると遠く離れた我が家でも空振と言うかガラスがガタガタと鳴った。
- 風鈴のすずしい音色
- 叔父さんが復員した時持って来たハマチの味。
- 父ととる火バチのあたたかさ。
- 空襲警報のサイレンが流れると急いで防空壕へ入った。
- 大発生時の日の見やぐらの早打ちの鐘の音
- ラーメン屋さんのチャルメラが聞こえると何とも言えなかった。
- スターマインのドーンとお腹の中までひびく花火の音。
- 冬の夜青年団が夜警で巡回する時のヒョウシギの音と鉄棒の地面をたたく音。
- 芸者さんとすれ違った時の何とも言えぬ化粧品の香り。
- 11月10日稲荷神社の祭典の頃は北風が冷たく寒さが来たのを感じた。
- 終戦後道路の行く車のアメリカ兵からもらったチョコレートの甘かった事。
- アイスキャンデー売りのチリンチリンの音。
- ワラのタキ火のにおい。
- 奥湯河原のけむり
- 東海道湯河原駅での下車する客のざわめきの多さ
- 門川の鈴木呉服店の前あたりに自転車屋さんがおり、そこは温泉場行の馬車の停留所だった
- 学校給食で出た干しリンゴの味。
- やき芋の焼けてきた時の匂い。
- 赤ギレが出来指に割れ目が出来た時の痛み。
- 生まれて初めて飲んだ牛乳のニオイ。
- 初夏の体育の時間、学年全員が体調悪い人以外海で泳ぐ楽しい一時。
- 小学校の畑でサツマイモを作ったりしていた時、学校の汚物を桶で運んだ時のニオイ
- 夏は大きなテントがはられ、小道地藏饅頭のお店がでて泳ぎつかれて冷えた体に温かい饅頭を求めて賑わっていた

町民向け公開セミナーの開催

2016年1月30日に五感体験アンケートの結果を元にした公開セミナーを開催し、広く湯河原町民を対象にプロジェクトの周知を図るとともに、ワークショップを実施して地元住民と学生による多世代間の関係構築を図った。



図2 公開セミナーの様子 (2016. 1. 30)

聞き取り調査の実施

2月7日にプレ調査を行ったうえで、2月23・24日および3月3日に、2つのチームを編成して、町内全10地区の老人会単位で順次「ふるさと語りの会（聞き取り調査）」を実施した。地区ごとの五感体験アンケート結果を参照しながら、各地区の暮らしの様子に関する具体的なエピソードについて聞き取りを行い、内容を約845項目のエピソードとしてまとめた（表4）（表5）。

また、同意頂いた方を対象に、聞き取りの前後に4項目の健康チェックとアンケートを行い、多世代が集い記憶を語り合うことと心身の健康との関わりを調べるためのデータを採取した。この健康チェックは、複数人（とくにここでは高齢者）が集まって思い出や経験談について会話するとき、話が弾むにしたがって、人々は次第に生き生きとしはじめ、また、互いに触発される形で、思いがけず次々と記憶が蘇ってくるようであることは、経験的に知られるところであるが、そうしたことを実際の心身の状態を測定することによって、医学的見地から確認することができるか、それをうまく捉えるためにはどのようなことを調べる必要であるかを把握するために実施したものである。現在集計・分析中の結果を踏まえて、多世代の交流と未病との関係について考察を進めていきたい。

今回、各区の老人会を通じて参集した高齢者の方々は非常に熱心に、また生き生きと思い出を語っていた。自ら記憶の風景を画用紙に描いて持参した人もあって、アンケートへの参加と聞き取りへの参加によって老人会会員を中心とする高齢世代の住民には、当プロジェクトが認知され、また絵図制作に関する当事者としての意識も共有されつつあるとみられる。

聞き取り調査の目的は、絵屏風に描く物語の素材を集めることにあるが、その過程を通じて、地域の暮らしの記憶や文化、経験の記録と継承を図ること、及び世代間の交流やつながり、ヨソモノと地域住民の交流やつながり、新旧住民同士の交流やつながりを育む機会にもなる。ただし、今回集中的に行った聞き取りは、学生を中心とするヨソモノによるものであり、地域内の多世代のつながりや交流の促進と検証は、今後絵図制作に至る過程で実施するはずの第2次、第3次の聞き取りの機会に期す。

また、この聞き取りに調査メンバーとして参加した学生に対しては、聞き取りに参加する前後の心境や認識の変化などについて報告することを課した（表6）。

学生の視点から多くの観察や気づきが報告されているが、その中に「高齢者に対する見方が変わった」という体験を報告するものがある。出会った高齢者の、思いのほかの元気さや記憶の鮮明さ、経験のすごさ等に触れて、高齢世代に関するある種のステレオタイプ

な見方がガラリと変わったという。それは高齢者の体験が若者の認識を変えさせるほどに真に迫力あるものであったと同時に、祖父母はじめ高齢世代と離れて暮らすような若者たちは、ほんのわずかな時間の会話によって崩れてしまうほど素朴なステレオタイプに侵されていたと考えることもできる。

また、高齢者の子供時代の遊びや行事への参加の仕方から、地域内隣近所の大人や隣人と行き来しかかわった様子や、一方で子供には子供の世界が存在していたこともわかる。地域コミュニティにおけるそうした重層的な人と人のつながりのあり様は、どのように失われてしまったのか、あるいはどのように現代的に形を変えて継承されているのか。

今後多世代共創コミュニティ形成の観点からは、今見たような世代に対するステレオタイプな見方から自由になることや、過去と照らした現在の変化や形を変えた継承の様子などについても、注意して見ていくことが必要である。

表4. 聞き取り調査の実施日程

日 程	時 間	地区名	参加者	会 場
2月23日 (火)	9:00-11:00	1	地区1 老人会 (15名)	中央区民会館
	10:00-12:00	2	地区2 老人会 (10名)	宮上会館
	13:00-15:00	3	地区3 老人会 (15名)	鍛冶屋会館
	14:00-16:00	4	地区4 老人会 (18名)	宮下会館
2月24日 (水)	9:00-11:00	5	地区5 老人会 (12名)	城堀会館
	13:00-15:00	6	地区6 老人会 (15名)	門川会館
	14:00-16:00	7	地区7 老人会 (15名)	お休み処
3月3日 (木)	9:00-11:00	8	地区8 老人会 (15名)	福浦会館
	10:00-12:00	9	地区9 老人会 (10名)	文化福祉会館
	13:00-15:00	10	地区10老人会 (10~15名)	川堀会館

表5. 聞き取り調査によって採集したエピソード (福浦・一部抜粋)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • 昔は漁業と石を取るのが主要産業だった • 海ではカニや貝を取ったり魚釣りをしたりして遊んだ • 漁師の小舟を勝手に使って遊んでいた。あまり遠くまで行くとマイクで怒られた • 船から落とされたり、沈められたりすることもあった • 台風が訪れるとアワビが流れ着くこともあった • 川にウナギを取りに行くこともあった。 • 井戸があり、子供が水を汲んでくるのが仕事だった • 近くの地区に住んでいる親戚とみかんと魚で物々交換したりしていた • どの家でも鰹節を自分で作っていた • 造船所が近くにあった • 市場で競りが開催されるときはホラ貝を吹いて知らせていた。その音は街じゅうに聞こえた • あじで作ったカレーライスやイワシのつみれ汁が美味しかった。 • ハンパのりを揉んで食べた。ご飯にかけて食べたり、鰹節と合わせて保存しておいた。 |
|--|

とても美味しかった。

- エバガニを堤防でとって味噌汁にして食べた。美味しかった。
- のり、わかめ、アシタバをよく食べた。
- 夏は子之神社でお祭りがあり、海岸に小屋がありそこで屋台や芝居が行われた。
- 中川一政さんが海岸で絵を描いていた。魚や弁当と絵を交換していた。
- 舟大工さんがいた。
- 福浦は漁業が栄えていた。漁があった時は夏にお祭りがあった。小6の時にみこしを担いだ。1/2にお神酒やお米をあげてから舟にお金を撒いた。子供たちが喜んでお金を拾いに行った。
- 福浦の港では、ハマチやあじ、カマスが獲れた。
- 冬は網締めといって漁はせずに、網の手入れなどをしていた。
- 大漁の時などのお祝いごとの時、絵柄のある藍染の着物のようなものを漁師さんが着ていた。
- 港ではブリがとれて、東京や熱海まで荷車や自転車で運んだ。
- 竜宮岩という岩があり、関東大震災の時に崩れて今はない。
- 定置網を朝の2時に仕掛けて、夕方に引き揚げに行く。引き揚げのお手伝いをすると魚がもらえた。
- 大漁の時は大漁旗を上げて船が港へ戻ってきた。
- 海岸で干してあるシラスを盗んで食べた。
- マンボウは刺身にして食べた
- 当時の子どもの服装は男子はフンドシ、女子はブルマで日頃からお手伝いをしていた。
- イカ釣りをした。とれたイカを天秤で担いで夕方、舟に乗せた。
- 小学生の頃、3~10月の朝と夕方に定置網でアジやサワラをとった。
- 夏休みなどの時期に、あまさんが使う一つめがねを持って朝10時に海に行き、泳いだり、サザエやアワビをとって夜帰った。
- 網に魚を入れて待っているとたくさん魚が釣れた。
- 石の下にあさがたくさんいた。
- 「しったか」や「なみのこ」がとれた。
- 福浦に田んぼはなく、漁業がメインだった。イワシやしらすがとれた。
- カサゴが海で釣れた。
- 神輿を海に入れて担いだ。
- いかだに乗って魚釣りをした。
- 海岸に一杯木イチゴが出来ていた。
- 天草をよくとった。
- 舟作りの職人がいた。板に墨で、図面を描き、カンナで削る。ふくらみなどは経験から製図をおこす。
- 定置網で高級なブリがとれた。さば、いわし、さんま等、バケツ一杯で売っていた。
- 半漁半農の生活だった。かつお舟は4隻ありエンジンがついていた。いわし舟でいわしをとっていた。いわしがかつおの餌になり、イケスでイワシを育てていた。小さい舟では伊勢エビやサザエ、ウニをもりでついてとっていた。
- 音無川の周りには井戸があって、用があるついでに汲みに行った。夏はスイカやトマトを冷やしていた。

- 小さい小川がたくさん流れていた。
- みかん、あけびを取りに行った。野苺を食べた。とれる場所を知っていることが自慢だった。
- お風呂の薪を自分で山でとってきて背負って持ち帰った。
- 山にメジロをとりに行った。餅網を使いみかんを餌にしておびき寄せた。穫ったメジロを飼っていた。鳴き声が美しかった。
- 石切り場でダイナマイトを使って遊んだ。
- 女性は漁師を海に送り出してから山へ枯れ枝を取りいった。



図3 「ふるさと語りの会」(健康チェックとヒアリング)及び結果の整理作業の様子



図4. 聞き取り参加者が描き持参した絵

表6 聞き取り調査に参加した学生による観察・気づきと感想

【問い】

- ①参加者の言動（話しぶりの変化、所作、表情）や発言で印象に残ったこと。
- ②自分自身がふるさと語りを通じて感じたこと。
- ③自分が聞いた中の一押しのエピソード

【報告】

(21歳・女性)

①初めにお顔を合わせたときは表情がこわばっていて警戒している様子だった方が、お話を進めていくうちに、湯河原のエピソードだけでなく、ご本人のこれまでの人生についても話されたこと。家族や友人にも話したことがない、当時の思いやエピソードまでお話してくださった。

②参加者の方々が、話していくうちに声が大きくなったり、身を乗り出したり目に見えるかたちで変化が見られたことで、相手の話を聴くということでもここまで心の変化がみられるのだと驚いた。

湯河原町の懐かしいエピソードだけでなく、ひとりひとりの人生観やこれまで生きてきて今感じることで聴くことが出来て自分にも大変勉強になる経験だった。

③「門川海岸の堤防で、ゴザをひいて涼んでいた。近所のおじいさんやおばあさんは昼寝をしたり、小学生は宿題をしていた。今、思い出してもとても気持ちがいい。」

無理に居場所をつくらうとしなくても、多世代が同じ空間にいる環境があったのだと感じました。また、今思い出しても気持ちがいいととても穏やかな表情で話されていた姿が印象的

だった。

(21歳・男性)

①初めよりも後半になるにつれて笑顔が増えているように感じた。特にいたずらをした時の話をしているときは、子供みたいに楽しそうに笑っていたのが印象的だった。

②地区ごとに思い出だけでなく、参加者の性格にも違いが出ていたのは印象的だった。(温泉場は特に活発的等)

③・ユリの根を取って、家に持ち帰り煮て食べていた。・台風の後には海岸に行くと薪になる流木のほか、芸者の下駄も流れ着いていた。

(21歳・女性)

多忙の中2日間、体力を吸い取られながらも、一生懸命聞き取り調査を実施し、ご協力してくださった先生方やわたけんの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。誠にありがとうございました。

前回2/7に行われたプレ調査では、3人が2人の方に対応していたため、人手不足等の大変さを感じることはなかったが、今回1回目で行ったとき、人手不足や健康調査等の流れが上手くいかなかったり、慣れていないための確な指示を出すのも難しく、時間が制限されているなかで行動することの厳しさを感じた。しかし、2回目以降では、様々な改善点生まれ、ふるさと語りの場面でも、どう話を聞き出せばよいのか、等のコツを掴むことが出来、多少の困難にもすぐに対応することが出来るようになっていった。協力してくださった皆さんも、どんどん技術を身につけ、動いてくれたため、今回の聞き取り調査を成功させることが出来、また来場者の方も多世代交流を楽しんで、話し足りないくらいお話をし、話し中や健康調査中、帰りには笑顔が沢山見えた。最初に受け付けにくる時の表情とは全く違ってることがとても印象的だった。加えて、多くの方にまた参加した！とても楽しませてもらった！！こういうことが未病につながるんだよと実感した！といった感想を言ってもらえた。データでも、フェイススケールの数値を見ると、なんと、フェイススケールを行った人68人中下がった人はたったの1人だった。これは本当に凄いことだと思う。健康調査で難しいのではないかとされていた、長谷川式も、思いがけず好評で、クイズ感覚で楽しく笑いながら行われていた。ふるさと語りでは、私自身、参加者の方がお話しされた時代に行ったことはないが、自分がお話しされている場所に入り込んでタイムスリップし、不思議とその方になったような気持ちで、光景も浮かび上がった。まるで、自分が絵屏風や昔の湯河原の中を冒険しているような感じがした。そこでは、今現在はなくなってしまったり薄れてしまった、多世代交流の原点や人々の心の変化、暮らし方、生き方を学ぶことができた。今、昔の湯河原町にタイムスリップしたらきっと自分はすぐにでも川や海、お祭りに行くだろう。3/3の聞き取り調査でも、また、今回のように素敵なお話を聞けることをとても楽しみにしている。次回は、人数があまり多くないため、効率的に対応できる方法をきちんと考えていきたい。来場者の方が笑顔で帰ってもらえて、ふるさと語りを行って本当に良かったと思った。

(23歳・男性)

①参加者の言動や発言で印象的なことは午前中100%で話を聞いている時と午後若干集中力が劣った状態では、話し方の熱がやはり午後の方が冷めているように感じた。

②昔は食料がないという話や自然の中で遊んでいたという話を聞くと、今の日本は物資に溢

れ一見ゆたかに見えるが、本当のゆたかさは何なのか考えさせられた。ただ、古き良き時代に戻ることはできないため、それ以上の未来を過去から作り上げていく必要があるとも思った。

③お祭りのとき若い衆で神輿を担いでいたが、玉串を何年も納めない旅館があったため神輿ごと旅館に突っ込んだ。というエピソードを聞いたときはさすが昔ならでは！という印象を受けた。

(20歳・男性)

①男の人のほうが戦争関連の話題が多かった気がした。どういうことをして遊んだなどを思い出しているときは楽しそうな表情を浮かべていた。

②自分は5歳以前のことなんてほとんど覚えてないといえるのに、皆さんよく覚えているなあと感じた。

③戦時中は川の上流の畑と自宅の間（5KM）を毎日往復していた

(22歳・女性)

①グループの中に湯河原育ちとそうでない人がいる場合、途中から来た人が黙ってしまうことが多々あった。しかし、比較的最近の話を振ると生き生きと話す様子が見られた。昔は子供が子供たちだけで勝手に山や川で遊ぶことが多いと聞き、今とは環境がかなり違うなと感じた。

②みなさんが野生の果物や野菜などのことを良く知っていて驚くと同時に、最近（私が都会育ちだからかもしれないが）は、自然は観光地として見に行くもののように感じているなど実感し、昔は自然がもっと近くにあったのだと感じた。

祖母や祖父には、意外とふるさとの話は聞いていないと改めて気づいた。

血の繋がっていない人から聞く話は、新鮮ですんなりと心に入っていった。

ふるさと以外の話、最近の話も今回の目的とは別で話を聞きたいなと思った

③みかん1箱分でキャバレーに行けたという話。その頃みかんがそれだけ高く売れたという。

(19歳・女性)

①聞き取り調査をする前はとても静かであまり喋らなかった80歳のおばあちゃんが聞き取り調査で生き生きと話し、その後の健チェックしている際には私のネイルが可愛いので真似したいと一気に若返った気がした。

②ふるさと語りの前後で私自身変化した点は年配の方とのコミュニケーションが上手くなったことだと思う。今までは話をするきっかけが上手く掴めなかったがふるさと語りを経験した後バイトでの接客で年配の方とスムーズに話すことができるようになった。また、ふるさと語りを経験したことにより湯河原昔の風景を知り、3日間しか滞在してないが自分の地元のような愛着が湧いた。

③昔は新崎川がとても綺麗で生活用水として飲み水や洗濯、川遊びまで使っていた。鍛冶屋地区は川が綺麗だからこそ川生活の中に水車があったりしたのだと思う。

(21歳・女性)

①・笑顔がたえなかった

・話していくうちにどんどん昔のことを思い出していた

- ・身振り手振りをいれてはなしてくれた
- ・小さい頃から湯河原にいるひとより、後から来た人の方が湯河原好きな印象を受けた。→東京への憧れ？
- ②・昔は今より近所付き合いであったり、周りとのつながりがつよかった。とても暖かい感じがした。・自分が経験したことの無いことや、今では考えられないような遊びの話を聞いて、世の中や人の変化を目の当たりにした
- ③・山でターザン・夏のアイスクャンデー屋さん

(20歳・女性)

- ①昔の話しをしてもらおうと、参加者は皆事細かく昔の記憶があり、話せば話すほどどんどんエピソードが出てきた。話している姿はすごく生き生きとしていて、楽しそうだった。調査が終わると、「本当に楽しかった今日はありがとう！」や「たまに若い人に話を聞いてもらうのいいわね」などと言っていた。
- ②今まで、テレビや本・授業で昔の暮らしぶりや戦争のお話など聞いたことはあり理解をしているつもりだったが、実際に聞くだけではなく体験者のお話を聞き、自分も会話することで同じ話でも受ける印象が全く違うなど感じた。お話を聞いているうちに、自分の地元の昔の姿を全く知らないことに気づき、知りたいと思うようになった。
- ③海産物が豊富で、海で簡単に岩牡蠣がとれたべていた・家の裏にある小川で上等のうなぎがとれたなど、今では皆がお金を出して食べたいと思うような食材が簡単にとれていたということが驚きだった。

(20歳・女性)

- ① ほとんどの方が、話していくうちに表情が明るくなっていくのを感じた。ただ、湯河原で幼少期を過ごさなかった方は、会話にあまり参加できず逆に黙り込んでしまうこともあった。戦後、苦しい思いをしたのか、話をふっても詳しく話そうとしない方もいた。
- ②昔の話はとても新鮮で興味深く、もっと聞いていたいと思った。確かに長時間話を聞くには体力が必要だったが、疲れてしまったのは「このことを聞き出さねば」という義務や目的が邪魔していたからではないかと思う。話をして楽しかったと言ってくれた方が居たのは売れ叱ったが、その呪縛があったために、湯河原出身でない方には肩身の狭い思いをさせてしまったのではないかと気になった。
また、昔のエピソードを聞くことで、生まれ育ったわけでもない湯河原という地に愛着を感じるようになった。とても素敵な街だと思ったし、これからも発展してほしいと感じた。湯河原に住む若者や、湯河原出身の方たちがこの話を聞いてもっと地元を愛してくれたらと思う。
- ③木炭車の後ろに捕まって自転車で走ったこと。

(21歳・女性)

- ①最初は遠慮をして話していたが、次から次に話したいことが出てきたようで、身を乗り出したり顔を紅潮させて話すようになっていた。
今日はよく寝れそう！と話していた。
血圧がぐっと上がったかも！と話していた。
- ②話を聞き出すためには、特に相手の話を注意深く聞き、相槌をうまく打つ必要があるが、自分も話に入り込んでくると、自然と会話の内容が深まってくる。

③下駄の鼻緒が切れてしまって雪の中を裸足で歩いたエピソード。壮絶な体験だったが、『昔は大変だったんだよー』と話し手が生き生きしていた。

(21歳・女性)

①私が話した参加者たちは、終始生き生きした表情だった。身振り手振りはあまりなかったように感じる。またどの参加者も声が非常に大きかった。最初から最後までずっとパワフルでエネルギー満ちたので圧倒されてしまった。お化粧をされているおばあちゃんも多くて素敵だった。パーマを定期的に行っているというおばあちゃんもいて、おしゃれを楽しんでいるのも印象的だった。

②どの参加者もとても元気でよく話していた。孤独死という単語をよく聞くので、老人は寂しいのかなと思っていたが、城堀の方たちも温泉場の方たちも週2以上の頻度で老人会の仲間たちと会っていて一人でも寂しくないと言っていて老人の認識が変わった。

中には、娘夫婦から一緒に暮らそうと言われても断り続けているというおばあちゃんもいて、本当に老人会のつながりが充実しているのだなと感じた。また、神奈川県の高齢者の方々と話したのが初めてで標準語を話す高齢者と会話するのが新鮮だった。体は不調だどの方もおっしゃっていたのに、表情は豊かで元気そうで、心は健康なんだなと感じた。私も、湯河原の高齢者のような老後を過ごしたいと純粋に思った。

③牛糞の中に渋柿やイチジクを入れて食べたという話

最初聞いた時は意味がわからなかった。衝撃的すぎて驚いた。発酵してホカホカの牛糞に渋柿を入れて食べるらしいが、今では考えられない。牛糞が熱すぎて柿が焦げてしまったこともあると聞き、自分がいかに現代っ子か実感した。

課題と次年度の展望

以上今年度は絵屏風制作プロジェクト実施体制の構築を構築し、絵屏風制作の素材となるエピソードデータの収集を主におこなったが、来年度は今年度の成果を踏まえた絵屏風づくりの作業が始まる。今年度は区や老人会に所属する一定年齢以上の住民とは関係を築き、協力を得ながら進めることができたが、例えば小中高の自動生徒や子育て世代、働き盛りの世代等の参加は得ることができなかった。次年度はこうした世代・層への働きかけを工夫して行い、あるいは、同じく湯河原で研究・活動に取り組む居場所プロジェクトなどとの横の連携を密にしながら、絵屏風そのものが多世代共創によって制作できるように仕向けていく。

4) 多世代コミュニティ形成のアプリ活用

「くちコミュゆがわら」の管理につき、ITに強い住民に委ねるべく交渉をしたが、維持費の問題などで残念ながら移行することができなかった。

5) 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成

背景と概要

平成26年度の調査で、地域ボランティアは約400名おり、観光や環境を主なテーマとして活動していることがわかった。平成27年度は、未病概念の普及と「未病に取り組む町づくり」をテーマに、住民リーダー・地域ボランティア育成、また多世代でのつながり作りを目的とした活動を行うことにした。具体的には、「ゆがわら多世代ふれあい劇場」とし

て、演劇の手法を用い、多世代の住民による学び合いワークショップを開催した。はじめの3回でコミュニケーションゲームやお芝居作り、4回目には創作したお芝居の発表を行った。演劇ワークショップとは、俳優のファシリテーションのもと、参加者が短いお芝居を創作し即興を交えて演じるという活動で、学校や職場のコミュニケーション教育などで用いられている。ワークショップ参加者に事後インタビューを実施し、どのような変化や気づきがあったかについてたずね、その内容を分析した。なお、発表した演劇の様子はDVDにおさめ、参加者に配布した。

方法・内容

平成27年8月、湯河原町老人クラブ連合会理事会にて、11月12日の老人クラブ連合会大会において「ゆがわら多世代ふれあい劇場」の発表を行うことについて承認を受けた。9月には「ゆがわら多世代ふれあい劇場」のチラシ作成・配布により参加者募集を行い、若年世代の参加確保のため、湯河原町役場職員にも参加要請を依頼した。

『ゆがわら多世代ふれあい劇場』の企画は下記の通りである。

【目的】プロの俳優（コミュニケーションティーチャー）のファシリテーションのもとで、多世代の参加者がともに演劇をつくり、練習から発表会までを体験することを通して、世代を超えたつながりを生み、心理社会的効果が得られることを目的とする。さらに、発表を観に来た人にとっても「多世代のつながり」や未病の重要性について意識を高める機会とする。

【概要】発表会を含めた全4回の演劇ワークショップ

【テーマ】多世代コミュニティづくり、多世代で未病にとりくむまちづくり

今回は、ワークショップの中での創作過程において「ある温泉街で町民の健康なくらしのためのプロジェクトが行われる」という設定をとりあげることとした。

【日程】

第1回：平成27年10月31日（土）14～17時 顔合わせ、シナリオの意見交換

第2回：平成27年11月 3日（火・祝）14～17時 アイデア出し、シナリオづくり

第3回：平成27年11月 7日（土）14～17時 作品づくり

第4回：平成27年11月12日（木）老人クラブ連合会大会の中で発表（約30分）

【開催場所】第1～3回は門川会館、第4回は町民体育館

【参加者】4～87歳までの男女計28名が1回以上参加した。参加者の内訳は、幼児・小学生3名、20代8名、30-40代3名、50-60代4名、70代以上10名。うち8名は役場職員、2名は他の職業、その他は無職・パートなどであった。

【スタッフ】

蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）、劇団衛星（京都市）代表
劇団衛星よりコミュニケーションティーチャー（俳優）2名

NPO法人フリンジシアタープロジェクトよりコーディネーター1名

他、研究プロジェクトメンバー

上述のように、演劇ワークショップを4回開催し、それによって参加者が得た体験とワークショップの成果について質的に探索した。以下が、調査の方法、結果、結論であり、これについては、第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（2016年6月東京にて開催）において発表する予定である。

図5. 概念図：演劇ワークショップ参加者の体験や気づき、変化

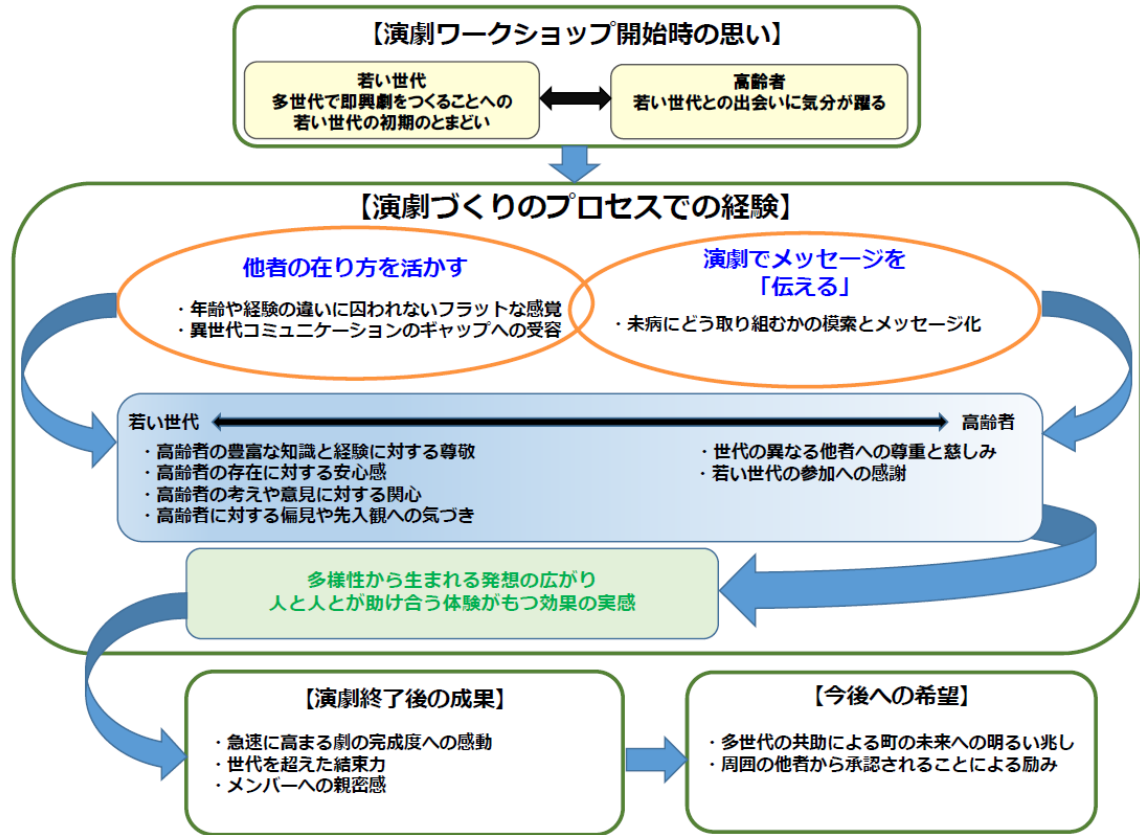


図6. 広報湯河原掲載

6) 医療福祉介護機関ネットワークの構築

以下、プライマリ・ケアの質とヘルスリテラシー、女性の癌検診受診との関連について検討した結果である（本結果については、第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会および関連の学会にて発表および関連の学術誌へ投稿予定である）。

【目的】

- ① プライマリ・ケアの主要な機能の一つである包括性と住民のヘルスリテラシーとの関連を検討する。
- ② プライマリ・ケアの質と女性癌検診受診との関連を検討する。

【方法】

本調査は浜松医科大学医の倫理委員会の承認を得て実施した。

ー対象

研究デザインは横断研究である。神奈川県湯河原町の住民基本台帳から無作為抽出した20～80歳の住民を対象に質問紙を配布し、郵送法で回収を行った。回答者のうち、プライマリ・ケア医を有していない住民は研究対象から除外した。

ー測定項目

プライマリ・ケアの質は患者経験を用いて評価を行った。米国Johns Hopkins大学で開発されたPrimary Care Assessment Toolを基に、我が国の背景に合わせて開発されたJapanese version of Primary Care Assessment Tool (JPCAT)を使用した。JPCATは、近接性、継続性、協調性、包括性、地域志向性のドメインで構成される。JPCATは我が国での妥当性・信頼性の検証が終了している。

住民のヘルスリテラシーは、同様に我が国で心理学的特性の検証が終了している14-item Health Literacy Scale (HLS-14)を用いて測定を行った。

その他、女性を対象に2年以内の乳癌検診及び子宮頸癌検診受診の有無、交絡因子として年齢、性別、世帯年収、最終学歴、プライマリ・ケア医への通院期間、併存疾患の数、主観的健康感を、自記式質問紙を用いて測定した。

ー解析

① プライマリ・ケアの包括性と住民のヘルスリテラシーとの関連
JPCAT 包括性ドメイン得点（2区分変数に変換）を主たる要因、HLS-14 総合得点を一次アウトカムとし、年齢、性別、教育歴、世帯年収、通院期間、併存疾患の数を共変量として調整した多重線形回帰分析を行った。また同様の解析を用い、包括性ドメイン得点とHLS-14ドメイン得点との関連を探索的に検討した。欠損値の処理にはComplete Case Analysisを用いた。

② プライマリ・ケアの質と女性癌検診受診との関連
JPCAT 総合得点を主たる要因、乳癌及び子宮癌検診受診をアウトカムとし、年齢、性別、教育歴、世帯年収、主観的健康感を共変量として調整した多重ロジスティック回帰分析を行った。また同様の解析を用い、JPCATの各ドメイン得点と乳癌及び子宮癌検診受診との関連を探索的に検討した。乳癌検診の解析対象者は50～74歳の女性、子宮癌検診の解析対象者は21～65歳の女性とした。欠損値の処理にはComplete Case Analysisを用いた。

【結果】

2,000人の住民に質問紙を郵送配布し、732人（回収割合36.6%）から回答を得た。回答者のうち、プライマリ・ケア医を有する381人が解析対象となった。表1に回答者の属性を示す。

表 1. 研究参加者の属性 (N=322-381)

属性	
性別, N (%)	
男性	131 (34.4)
女性	247 (64.8)
年齢 (歳), 平均 (標準偏差)	63.4 (12.6)
最終学歴, N (%)	
高等学校未満	59 (15.5)
高等学校	163 (42.8)
短大	81 (21.3)
大学以上	75 (19.7)
年間世帯年収 (百万円), N (%)	
<2.00	89 (23.4)
2.00-4.99	193 (50.7)
≥5.00	78 (20.5)
通院期間 (年), N (%)	
<1	33 (8.7)
1-5	138 (36.2)
>5	202 (53.0)
併存疾患の数, N (%)	
0	70 (18.4)
1	142 (37.3)
≥2	163 (42.8)
主観的健康感, N (%)	
よい	44 (11.5)
まあよい	85 (22.3)
ふつう	150 (39.4)
あまりよくない	75 (19.7)
よくない	26 (6.8)
JPCAT, 平均 (標準偏差)	
総合得点	53.8 (15.0)
近接性	48.5 (25.2)
継続性	67.7 (19.1)
協調性	59.6 (25.2)
包括性 (必要な時に利用出来る)	57.8 (23.7)
包括性 (実際に提供されている)	39.2 (25.4)
地域志向性	49.5 (20.7)
乳癌検診 (女性のみ), N (%)	
受診あり (2年以内)	96 (25.2)
子宮頸癌検診 (女性のみ), N (%)	
受診あり (2年以内)	93 (24.4)
HLS-14, 平均 (標準偏差)	
総合得点	51.2 (7.9)
機能的ヘルスリテラシー	20.2 (4.2)
伝達のヘルスリテラシー	18.0 (3.9)
批判的ヘルスリテラシー	13.1 (3.4)

表 2. プライマリ・ケアの包括性とHLS-14スコアとの関連：多重線形回帰分析 (N=289)

アウトカム	モデル 1		モデル 2		モデル 3	
	B (95% CI)	P値	B (95% CI)	P値	B (95% CI)	P値
HLS-14						
総合得点	1.99 (0.24 to 3.74)	0.026	2.16 (0.44 to 3.89)	0.014	2.25 (0.49 to 4.01)	0.012
機能的ヘルスリテラシー	0.31 (-0.65 to 1.27)	0.523	0.36 (-0.57 to 1.29)	0.446	0.34 (-0.54 to 1.22)	0.450
伝達のヘルスリテラシー	1.08 (0.18 to 1.98)	0.019	1.10 (0.20 to 2.00)	0.017	1.10 (0.24 to 1.97)	0.013
批判的ヘルスリテラシー	0.76 (0.01 to 1.52)	0.048	0.79 (0.04 to 1.54)	0.040	0.90 (0.16 to 1.65)	0.018

HLS-14=14-item Health Literacy Scale; HL=ヘルスリテラシー; B=非標準化回帰係数; CI=信頼区間

モデル 1: 調整なし

モデル 2: 年齢、性別、教育歴、世帯年収を共変量として調整

モデル 3: 年齢、性別、教育歴、世帯年収、通院期間、併存疾患の数を共変量として調整

表 3. JPCATスコアと女性癌検診受診との関連：多重ロジスティック回帰分析^a

スケール	乳癌検診 ^b (N=146)		子宮頸癌検診 ^c (N=109)	
	aOR (95% CI) ^d	P値	aOR (95% CI) ^d	P値
JPCAT				
総合得点	1.32 (1.01-1.72)	0.039	1.15 (0.87-1.52)	0.320
近接性	1.08 (0.93-1.26)	0.308	1.09 (0.91-1.31)	0.348
継続性	1.12 (0.92-1.36)	0.253	1.00 (0.82-1.23)	0.974
協調性	1.18 (1.02-1.37)	0.026	1.14 (0.96-1.33)	0.130
包括性 (必要な時に利用出来る)	1.10 (0.94-1.29)	0.215	1.01 (0.86-1.20)	0.887
包括性 (実際に提供されている)	1.10 (0.96-1.27)	0.167	1.13 (0.97-1.31)	0.120
地域志向性	1.34 (1.10-1.64)	0.013	1.12 (0.91-1.36)	0.291

JPCAT=Japanese version of Primary Care Assessment Tool; aOR=調整オッズ比; CI=信頼区間

^a年齢、教育歴、世帯年収、主観的健康感を共変量として調整

^b50-74歳女性が解析対象

^c21-65歳女性が解析対象

^d10点増加あたり

表2にプライマリ・ケアの包括性とヘルスリテラシーとの関連についての結果を示す。JPCAT包括性ドメイン得点は有意にHLS-14総合得点と関連していた (B = 2.25; 95%CI 0.49-4.01)。HLS-14ドメイン得点の中では、伝達のヘルスリテラシー (B = 1.10; 95%CI, 0.24-1.97)、批判的ヘルスリテラシー (B = 0.90; 95%CI 0.16-1.65)との関連に有意差を認めた。

表3にJPCATで評価したプライマリ・ケアの質と女性癌検診受診との関連についての結果を示す。JPCAT総合得点は有意に乳癌検診受診と関連していた (10点増加あたりOR 1.32; 95%CI 1.01-1.72)。JPCATドメインの中では、協調性及び地域志向性と乳癌検診受診との関連に有意差を認めた。一方子宮頸癌検診受診との関連は統計学的に有意ではなかった (10点増加あたりOR 1.15; 95%CI 0.87-1.52)。

【考察】

本研究の結果より、プライマリ・ケアの主要な機能の一つである包括性が、住民のヘルスリテラシーと関連することが明らかとなった。従って、包括性を向上させるプライマリ・ケア提供者の取り組みが、未病を含めた住民の健康と密接に関係するヘルスリテラシーを改善させる可能性が示唆された。

また、患者経験を用い評価したプライマリ・ケアの質が、重要な予防医療行動の一つである乳癌検診受診と関連することが示された。一方、子宮癌検診に関しては統計学的に有

意な差が見られなかった原因としては、住民の年齢層によってプライマリ・ケアの質が予防医療行動に及ぼす影響が異なる可能性が考えられた。

本研究の限界として、横断研究であるため因果関係について強い結論を導くことは困難である点、単一地域を対象としており外的妥当性に制限がある点が挙げられる。今後、縦断研究や別地域での調査が必要と考えるが、少なくとも、湯河原町におけるプライマリ・ケアの質向上活動を通し、住民のヘルスリテラシーおよび予防医療行動を改善させられる可能性が示唆された。

7) 要介護度進展の予測および介入・評価

1. 湯河原町による調査結果解析

平成26年5月に湯河原町が湯河原在住の65歳以上高齢者2262名（うち要介護認定者287名）及び主介護者300名を対象に質問紙調査を実施した。本調査は、無作為抽出の郵送方式、民生委員・老人クラブによる声かけ、在宅サービス受給者を対象とした担当ケアマネージャーからの聴き取り等の方法により実施された。質問項目は大きく分けて、属性、地域とのつながり、健康づくり、介護・福祉サービスの4分野であった。回収率は、65歳以上高齢者24.5%。主介護者25.7%であった。湯河原町より本調査結果の解析の委託を受け、その結果を平成27年11月に行われた第74回日本公衆衛生学会総会において口演発表した（2演題）。

（1）独居高齢者の生活実態調査とそれに基づく介護・福祉サービスの提案

【目的・方法】わが国では、高齢化率の増加、核家族化の進行、生涯未婚率の上昇により、独居高齢者はますます増加していくことが見込まれる。石川隆志らの「秋田市在住の独居高齢者の生活リズムと生活実態」において、独居高齢者が社会的孤立のリスクファクターを持ち合わせていることが分かっている。本研究では更に独居高齢者を性別や要介護認定の有無によって分類することで、より細分化された視点で真のハイリスク高齢者を明らかにする。加えて、高齢者の生活実態及び、生活上の危険リスクや望まれる介護サービス等についても調査にすることで適切な生活環境の構築、介護サービスの提供へとつなげる。

上記に示した湯河原町が行ったアンケート調査結果の回答者を独居高齢者と非独居高齢者の2群に分け、それぞれの項目について χ^2 検定にて解析した。

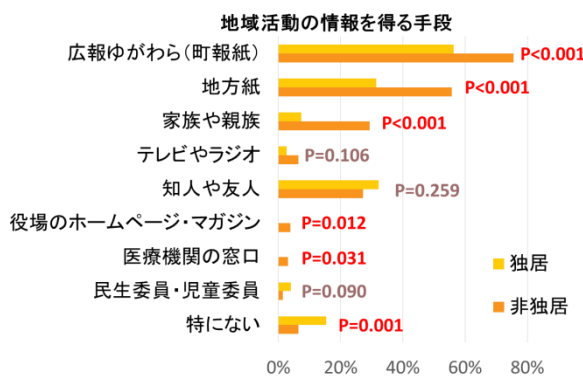
【結果】回収率は10.7%であった。独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、女性の割合が有意に高かった（ $P<0.001$ ）。また、独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、75歳以上の割合が有意に高かった（ $P<0.001$ ）（表1）。

	人数	内訳			
		男	女	介護認定あり	75歳以上
独居高齢者	154	36 (23.4%)	114 (74.0%)	48 (31.2%)	104 (67.5%)
非独居高齢者	559	252 (45.1%)	291 (52.1%)	137 (24.5%)	283 (50.6%)
合計	713	288	405	185	387

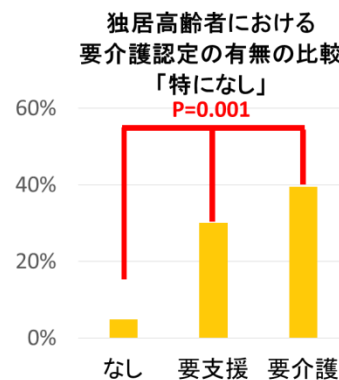
（表1）

地域活動やイベント、街からのお知らせ等情報入手経路を尋ねた結果、独居高齢者は「家族や親族」からはもちろん、「広報ゆがわら」「地方紙」からの情報入手においても非独居高齢者と比べ有意に低かった（3項目ともに $P<0.001$ ）。一方、情報を得る手段がない高齢者の割合は、独居高齢者の方が非独居高齢者よりも有意に高かった（ $P=0.001$ ）（表2-1）

表2-1）。また、独居高齢者の中でも要介護認定を受けている高齢者の割合が有意に高かった（ $p<0.001$ ）（表2-2）。

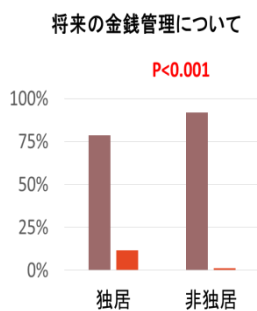


(表 2 - 1)

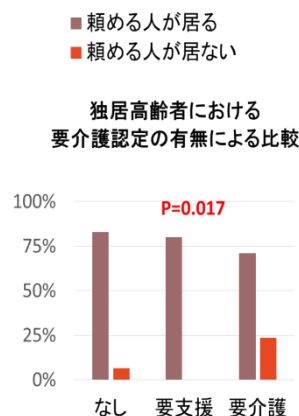


(表 2 - 2)

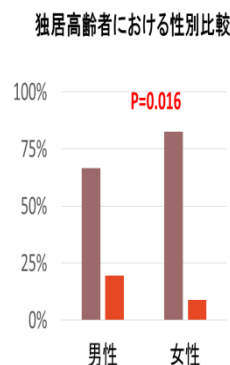
将来の金銭管理についてどのように考えているかを尋ねた結果、独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、任せられる人が居ないと回答した割合が有意に高かった（ $P<0.001$ ）（表3-1）。さらに、独居高齢者の中でも男性及び要介護認定を受けている高齢者の方が頼める人がいない割合が有意に高かった（ $P<0.001$ ）（表3-2, 3）。同様に、災害時の避難場所を知っている割合も、独居高齢者で有意に低く、中でも男性、要介護認定者の方が有意に低かった。



(表 3 - 1)

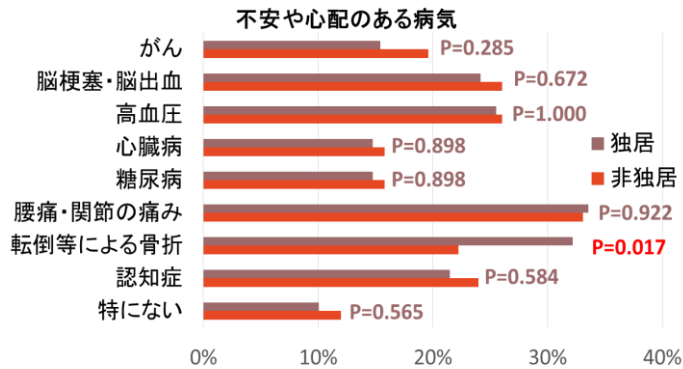


(表 3 - 2)

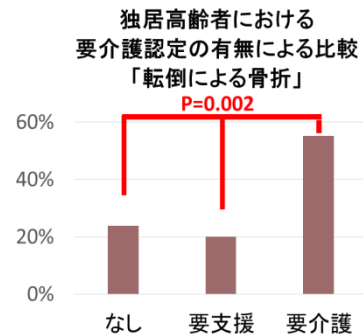


(表 3 - 3)

不安や心配のある病気について尋ねた結果、独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、転倒等による骨折の心配している割合が有意に高かった（ $P=0.017$ ）。その一方で、がん等他の疾患については、双方に有意な差は認められなかった（表4-1）。また転倒の心配をしている独居高齢者の中では、要介護認定を受けている高齢者の割合が有意に高かった（ $P=0.002$ ）（表4-2）。

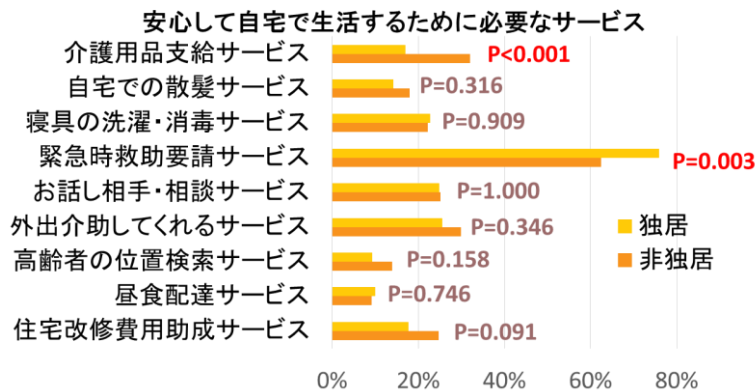


(表4-1)



(表4-2)

安心して自宅で生活するために必要だと思うサービスを探った結果、独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、緊急時にボタンを押せば助けを求められることができるサービスと回答した割合が有意に高かった（ $P=0.003$ ）。それに対し、独居高齢者の方が非独居高齢者と比べて、紙おむつ等の介護用品を支給するサービスと回答した割合が有意に低かった（ $P<0.001$ ）（表5）。



(表5)

【考察】独居高齢者は日頃から生活の補助や管理を行ってくれる同居する家族等がないため、得られる情報が減少したり、日常生活に何らかの不安を抱いていると考えられた。このことは非独居高齢者との間にQOLの差を招く要因であると懸念される。特に独居高齢者の中でも男性や介護認定を受けているとこの傾向が強く、真のハイリスク高齢者であるといえる。ハイリスク高齢者は、転倒等による骨折への心配を抱えたり、一人で生活す

ることに対して支援するサービスの提供を求められていることが分かった。

以上から、ハイリスク高齢者への介護・福祉サービスの供給比重の増加や、地域とのつながりを積極的に作るような仕組みの必要性が考えられた。介護・福祉サービスとしては、緊急時にボタンを押せば助けを求めることが出来るサービスの他にも、金銭管理の委託サービスやハイリスク高齢者所在の把握による災害時対策等が挙げられる。このような取り組みや地域とのつながりによって、社会的孤立を防ぎハイリスク高齢者とその他の高齢者間のQOL格差を埋めることが、高齢者のQOLの底上げにつながると考えられる。

(2) 介護保険受給者の社会的孤立解消へ向けた介護サービスの模索

【目的・方法】我が国では単身世帯が増加し、65歳以上の高齢者人口のうち一人暮らしの割合は24.2%である。それに伴い、高齢者の社会的孤立が深刻な問題となっている。斎藤らの「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」によると「社会的孤立」に陥りやすい高齢者は「一人暮らしの未婚の高齢者」とされている。そこで本研究では、介護認定を受けている高齢者を含めた社会的孤立や地域交流の現状を明らかにし、各介護度別に給付されるべき適切な介護福祉サービスを解明する。

上記に示した湯河原町が行ったアンケート調査結果の回答者を健常者と要介護認定者（要支援者・要介護者）の2群に分け、それぞれの項目について χ^2 検定にて解析した。

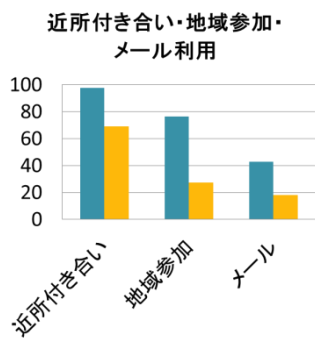
【結果】要介護者は192名（26.5%）であった。性別及び要介護度別の分布は表1のとおりであった。

			人数	性別(男:女)	内訳	割合(%)
健常者	一般高齢者		532	224:291	532	
要支援・要介護	要支援	要支援1	24	2:7	9	4.7
		要支援2		5:10	15	7.8
	要介護	要介護1	168	22:45	67	34.9
		要介護2		22:34	57	29.7
		要介護3		10:15	26	13.5
		要介護4		4:10	14	7.3
要介護5			3:1	4	2.1	
小計		192	34:61	192	100	
合計		724	293:415	724		

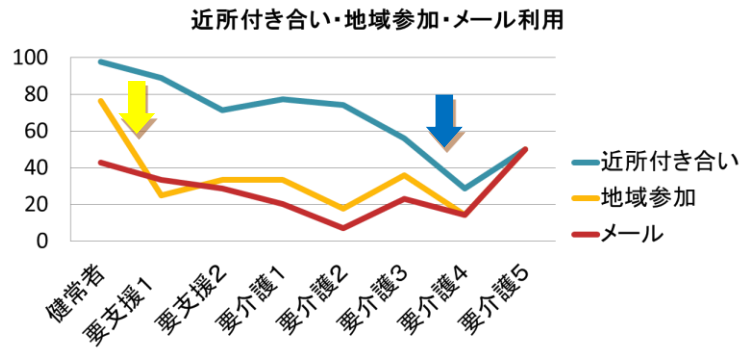
(表1)

近所付き合いの有無・地域活動の参加有無・メールの利用有無をそれぞれ尋ねた結果、これら3つの項目すべてにおいて、要支援・要介護は健常者と比べて有意に低かった（表2-1）。

この結果を介護度別に表した結果、地域交流をしている割合は、一般高齢者と要支援1との間（76.4%対25%）で急激に低下していた。さらに、近所付き合いをしている割合は、要介護度2と要介護度3の高齢者の間（74.1%対56%）で急激に低下していた。また、メールに関しては介護度の進展によって明確な差はみられなかった（表2-2）。



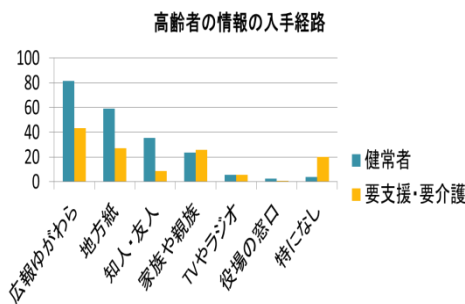
(表 2-1)



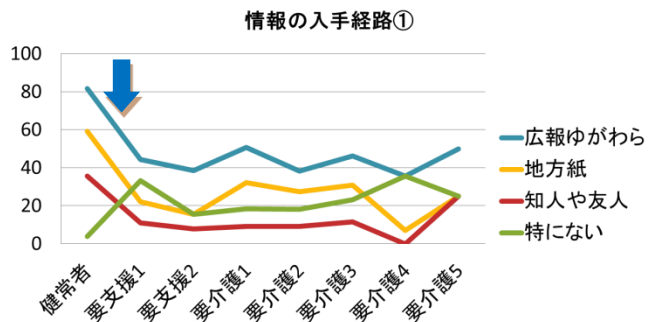
(表 2-2)

地域活動・イベント等情報の入手経路を尋ねた結果、健常者は要支援・要介護に比べ、広報ゆがわら・地方紙・知人や友人を地域の情報源としている割合が有意に高かった。その一方で、家族や親族・TVやラジオ・役場の窓口から情報を得ている割合は健常者と要支援・要介護の間に有意差は認められなかった。しかし、要支援・要介護の方は健常者と比べ、入手経路が特にないと回答する割合が有意に高かった(表3-1)。

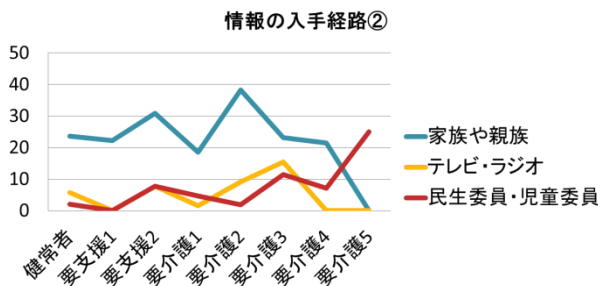
この結果をさらに細かく介護度別に表した結果、広報ゆがわら・地方紙・知人や友人を入手経路とする割合が健常者と要支援1の間で急激に低下していた。さらに入手経路が特にない割合も健常者と要支援1の間で明確な差が生じた(表3-2)。その一方で、家族や親族・テレビやラジオ・民生委員や児童委員を入手経路とする割合は介護度によって顕著な変化はなく、横ばいであった(表3-3)。



(表 3-1)



(表 3-2)



(表 3-3)

【考察】 要支援・要介護者の社会的孤立の進行を防ぐには、介護度に応じたサービスの提

供が重要である。一般高齢者には地域活動に参加し、交流を促すサービスを提供すればよいが、要支援となった高齢者にはそれに加え、情報からの孤立に対する対策を立てなければならない。たとえば、特定の介護度の高齢者へ、社会交流・情報機器操作を目的とした教育の機会を提供することなどが考えられる。このような体制づくりが要支援・要介護の高齢者の社会的孤立の進行を防ぐことにつながると考える。

2. プレ調査結果解析

平成26年8月に本プロジェクト開始前のプレ調査として、要介護認定を受け、介護サービスを受給している湯河原町在住の65歳以上高齢者90名を対象に聞き取り式の質問紙調査を実施した。質問項目は、上記湯河原町による調査項目を一部抜粋したものに、既存のスケールを用いたQOL（生活の質）、ADL（日常生活動作）、APDL（生活関連動作）、及び、健康状態の評価等とした。本調査の最大の特徴は、自記式では回答できない認知症患者等に対し、調査員が高齢者介護福祉施設を訪問し、一人一人に対し、聞き取り式の方法により実施した点である。

同様に、平成27年3月にも、上記調査における改善点を踏まえ、本プロジェクト研究のプレ調査として、要介護認定を受け、介護サービスを受給している湯河原町在住の65歳以上高齢者72名を対象に聞き取り式の質問紙調査を実施した。過去2回の調査を踏まえて質問項目を改良し、QOLについての項目の縮小、高齢者基本チェックリストの導入を行った。

上記2回の聞き取り式調査結果について、平成27年11月に行われた第74回日本公衆衛生学会総会において口演発表した（1演題）他、現在進行している本調査の途中結果と合わせて平成28年6月に行われる第66回日本病院学会にて口演発表する予定である（2演題抄録提出中）。

（1）家族との同居の有無及び施設入所とADL,QOLとの関連

【目的・方法】清水等によると、在宅高齢者は身体的不調を示す者が多く、人とのかかわりも比較的少ないことが示されている。しかし、高齢者が独居なのか、家族と同居しているか等の居住形態によってその性質は異なり、一様に議論することができないと思われる。そこで本研究では、一般にアンケート調査の協力が得られにくい、要介護度の高い高齢者を対象に、居住形態がADLとQOLに及ぼす影響と、本人が感ずる居住形態のメリット・デメリット及び、高齢者の生活実態や心情的因子を明らかにすることで、独居者や施設入居者に対する適切なサービスを模索することを目的とした。

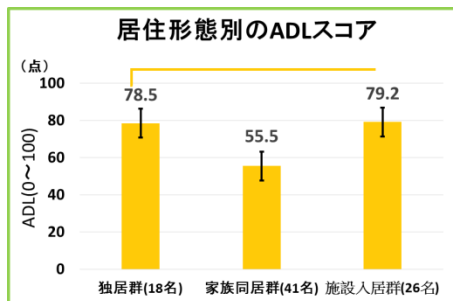
対象者の主観的な要素に着目するため、量的データと質的データを組み合わせる混合研究方法を用いた。量的研究を行った後に結果の裏付けとして質的研究を行う研究デザイン（順次的説明デザイン）を用いた。また、質的データを量的データに埋め込み、量的データの結果を説明づける両データの統合方法（embedding）を用いた。

【結果】各群における対象者の年齢及び要介護度の分布は表1の通りである。有効な回答が得られた対象者は85人であった。

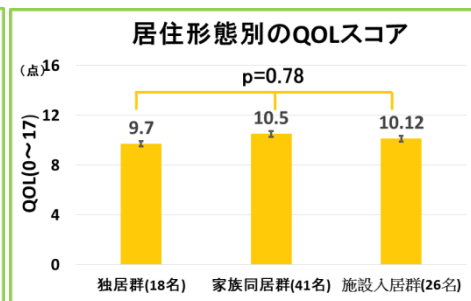
	独居群	家族同居群	施設入居群	計	
人数	18人	41人	26人	85人	
性別				t検定(ADL)	t検定(QOL)
男性	3	10	8	p=0.57	p=0.32
女性	15	31	18		
年齢					
65歳未満	3	7	2	p=0.08 (70歳未満と 70歳以上)	p=0.69 (70歳未満と 70歳以上)
65-69歳	0	2	0		
70-74歳	2	7	0		
75-79歳	0	0	0		
80-84歳	7	8	6		
85-89歳	3	4	7		
90歳以上	3	12	9		
年齢不明	0	1	2		
要介護度					
要支援1	0	4	0		
要支援2	3	0	0		
要介護1	0	0	0		
要介護2	5	8	5		
要介護3	1	6	1		
要介護4	1	3	0		
要介護5	0	2	2		
不明	8	18	18		

(表1)

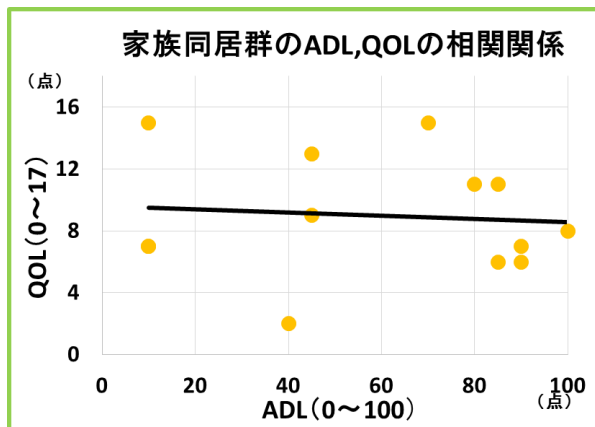
一元配置分散分析を行った結果、家族同居群においてADLが有意に低かった ($p=0.01$) (表2-1)。しかし、QOLについては、3群間で有意差は認められなかった ($p=0.78$) (表2-2)。家族同居群のADL、QOL間の相関係数を求めたところ、 $R^2 = -0.088$ であり、相関が見られなかった (表2-3)。一般的に高齢者のADLとQOLは正の相関関係があるとされているが、そのような結果が得られなかったことから、家族同居群ではADL低下に伴うQOLの低下を防ぐ何らかの要因があることが示唆された。



(表2-1)



(表2-2)

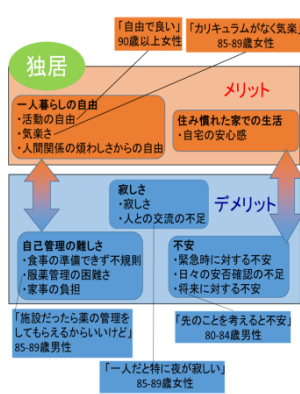


(表2-3)

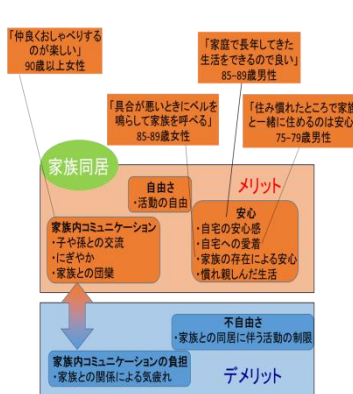
独居のメリットとして、自由や住み慣れた安心感が挙げたが、これはデメリットとして挙げた自己管理の難しさや緊急時の不安等とそれぞれ表裏を成している。独居者は自由や安心感を保持しつつも生活のサポートを望んでいた（表3-1）。

家族同居のメリットとして、家族とコミュニケーションを取れることが多く挙げた。一方で、過度なコミュニケーションや嫁姑関係などは気疲れというデメリットへと繋がっている。独居群と同様に自宅に住むことへの安心感がメリットとして挙げたが、独居群と異なり、不安はデメリットとして挙げなかった（表3-2）。

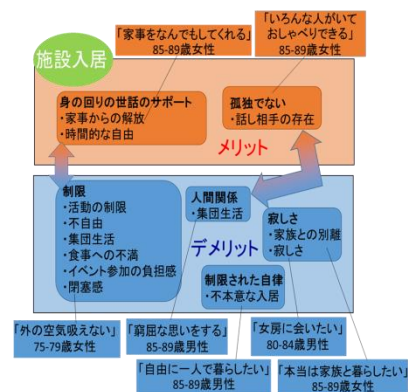
施設入居のメリットとして、身の回りのサポートや孤独ではないことが挙げた。一方で、多数の丹入居者にサービスを提供する上で、入居者に一定の身体的精神的な制限を課さなければならず、デメリットとして挙げた。また、孤独ではないというメリットの反面、集団生活における人間関係がデメリットとして挙げられた（表3-3）。



(表3-1)



(表3-2)



(表3-3)

【考察】「家族同居群」のQOLの低下を抑制する要因として家族内コミュニケーション、安心感、自由さが考えられた。「独居群」でのデメリット（「不安感」や「自己管理の難しさ」と「施設入居群」でのデメリット（「活動の制限」）は相反していた。家族同居群では双方のデメリットを補完できる可能性が示唆された。「独居群」では「家族同居群」にみられる心情面のpositiveな要素が少なく、関連するnegativeな要素（「不安」や「寂しさ」）が多く見られた。「施設入居群」は、入居者間の関係が良好な者がいる一方で、施設入居に不満を抱える者もあり、その評価は一義的なものではないと考えられる。

先行研究では、多世代交流による介入によって、高齢者のQOLが優位に改善したことが示されている。（亀井et al. 2011）本研究で明らかになった「独居群」と「施設入居群」におけるnegativeな要素（寂しさ、不安）はQOL低下の要因となる。そこで、「独居群」と「施設入居群」に共通するデメリットに対しては、地域内の多世代交流が有効な改善策となりうる。例えば、各高齢者に小学生一人を文通相手として担当させるなど、長いスパンで関係を築けるようなプログラムを作成することが考えられる。担当として始まった関係が、日ごとに親密な関係となり、家族の代替となるような存在となっていけば、「独居群」と「施設入居群」のデメリットをカバーできると考える。

3. 第一回本調査

また上記のプレ調査を踏まえ、平成27年9月に本プロジェクト研究第一回本調査とし

て、要介護認定を受け、介護サービスを受給している湯河原町在住の65歳以上高齢者121名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、前回調査の質問項目を一部改良したものをを用いた。本調査においては、前向きに観察調査を行うことから、調査対象となる高齢者介護福祉施設を絞った。

前向きに観察調査を行うため、施設が使用している電子カルテシステムにPLR（分散型デジタル管理システム）を導入することとし、現在、受け入れ施設の電子カルテシステム会社と折衝中である。

8) 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発

湯河原を含む神奈川県西地域は「未病癒しの里」として70の施設を認定している。また「県西ウォーキングガイドで75のハイキングコースを指定したが、そのうちの6が湯河原町内に存在する。これらの情報を「くちコミュ ～湯河原～」に掲載した。

本プロジェクト終了後も継続してアプリが使われるためには、アプリ管理者を地元住民に任せる必要がある。

適切な人物が見つかり、交渉をしていたが、残念ながら引き受けてもらうことができず、平成28年度は地域住民または組織において管理者を探し、さらに内容の充実を図る。

9) 温泉活用による未病への効能の科学的データ収集と解析

本年度の活動実績としては、

- 1、代表機関および各研究参加機関における倫理委員会への申請と承認
 - 2、臨床試験の開始
- であった。

代表機関である慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部、政策・メディア研究科における実験・調査倫理委員会への申請書受付は、平成27年8月7日、承認日は平成27年8月27日となった。臨床試験参加者はH28年3月末で3名である。（リクルート達成率7.5%）

湯河原町における本研究の認知度が低く、さらに広報活動を広げ、登録を増やすことが課題である。

10) 多世代共創コミュニティ指標作成

多世代関係尺度を開発し、未病との関係の深い「生きがい（ikigai9）」との関連を検証した。（本結果については、第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会および関連の学会にて発表および関連の学術誌へ投稿予定である。タイトルは「多世代関係と生きがいの関連についての研究－湯河原町住民調査より－」である。）

【目的】多世代交流を通して地域全体で健康増進に取り組むことの有用性が注目されている。先行研究では人々のソーシャルネットワークや社会参加の程度が、生きがいや主観的健康観に影響すると報告されている。一方、多世代交流の効果に着目した研究は少ない。神奈川県湯河原町では「未病」をテーマに2015年より多世代の活動を展開している。本研究は活動開始前における、多世代交流と生きがいの関連を明らかにすることを目的とする。

【方法】同町の住民基本台帳より無作為抽出した20－79歳の男女2000名を対象とし郵送による自記式質問紙調査を実施した。調査項目は個人属性（性別、世代）、生きがい（Ikigai9）等とした。また多世代交流の測定には、「あいさつする」などの交流内容を表

す16項目からなる『多世代関係尺度』を作成した。家族以外で当該交流をする相手の有無（有1、無0）を「小学生以下」～「70代以上」の7世代について尋ねた。該当者がいない場合は「いない」とした。「いない」を除いた全ての回答の総和を「多世代関係」、同世代の回答の総和を「同世代関係」、それ以外の回答の総和「斜交関係」を算出した。

【結果】732名より回答を得た。そのうち多世代関係尺度とIkigai9に欠損のない394件（有効回答率19.7%）について分析した。女性62.4%、男性36.8%、平均年齢は55.77歳（S.D.14.60）であった。同世代関係（同）と斜交関係（斜）を平均値で高低に分け2×2の4群とした。生きがいを従属変数として一元配置の分散分析を行ったところ群の効果は $F(3,390)=16.57$ 、 $p<0.01$ で有意であり斜交関係多+同世代関係多群で斜交関係少+同世代関係少と斜交関係少+同世代関係多群よりも得点が有意に高かった。

【結論】同世代関係、斜交関係の豊かさは生きがいに影響を与えていた。

11) 未病の評価法の検討

未病の状態像は様々であり、また診断基準も明確ではない。そこで未病を治す健康行動及び、主観的健康観を代替指標として使用することを検討した。具体的には社会参加の程度、飲酒喫煙、日頃の健康行動等である。同町の住民基本台帳より無作為抽出した20-79歳の男女2000名を対象とし郵送による自記式質問紙調査を実施した。結果の分析は今後実施する予定である。

12) 多世代共創コミュニティが未病に及ぼす効果検証のための体制作り

「多世代共創コミュニティ」という社会科学のアプローチを「未病」という自然科学的アプローチにつなぐ試みとして、多世代の関係性を見る指標の開発を行った。

絵屏風、多世代拠点、演劇ワークショップといったコミュニティ参加者とそれ以外の住民とのマルチレベル解析をすることで、効果を検証する予定である。

一方、絵屏風の聞き取り調査前後で、自律神経能、ストレス度のチェックを行っているが、2時間程度の聞き取りの前後でこれらの測定結果に差が見られることから、自然科学的解析も併せて行っていく予定である。

プロジェクトのリサーチ・クエスチョンに対する進捗と明らかになったこと、次年度の課題について

1. 持続可能な社会の実現にとって、どのような多世代的なアプローチが有効か？どのような問題に何故有効なのか？

そもそも「持続可能」を謳うということは、この社会が「持続可能ではない」ことの裏返しであるが、この社会が「持続可能かどうか」についての意識をあまりしていない国民がほとんどである。

湯河原町は現在高齢化率が38%であり、2040年には48%に達する。行政はこうした事態を深刻に考えているが、地域住民で、この問題を深刻に考えている人は少ない。

一方地域のコミュニティは都心ほどでないにしても、湯河原町でも崩れている。婦人会、青年団などは入会者が減少し、保っているのが消防団くらいだという。

区長など地域住民を代表する人たちに、まずこの危機意識を認識してもらったうえで、何故多世代によるアプローチが必要なのかについても、自ら考えてもらうことが必要と考

え、平成28年度は事実を共有した上で、ともに解決策を考えていきたい。

2. 特に若い世代（子供、学生、若年単身者、子育て世代等）にとって、多世代共創的活動に参加するためのインセンティブにはどのようなものが考えられるか？

時間的制約の多い世代に取って、コミュニティに参加することは難しい。やはり、コミュニティに参加することが町の存続のために重要だという共通認識を育成することが遠回りのように見えて近道かもしれない。

3. 持続可能な社会の実現にとって効果があると思われる多世代共創的活動の中で、一部の世代に十分なインセンティブがないことが障壁となっている場合、参加を促すために、どのような制度設計が考えられるか？

湯河原町においては、湯河原で生まれ育ったグループと高齢になってから移住した住民のグループもあり、交流がスムーズでない面もある。現在多世代拠点作成を進めているが、子供たちを中心にするときさまざまな世代や職種の人たちが分け隔てなく集まる。

町の将来について共通した認識が持てれば障壁は打破できると考えられる。

4. 多世代共創的活動は人々の意識にどのような変化をもたらすか？そのような意識変化は持続可能な社会の実現にとってどのような含意があるか？

多世代共創のイメージとして今後増加する高齢者層を如何に支えるかに話題が行きがちであるが、絵屏風の聞き取り調査を通じて、一番影響を受けて変わったのは学生である。社会の断層である昭和30年代より前の暮らしは今の70代以上に聞いて記録に残しておかない限り永遠に消滅してしまう。

湯河原町においても新幹線開通のためにトンネルを掘った土を大量に使って大規模な埋め立てや田畑をつぶして住宅地にした。町そのものの形が大きく変わったのであるが、昭和30年代以降の大量生産・消費の時代とそれ以前ではどちらが持続可能社会化は明らかである。

その意味においても多世代共創的活動によって、温故知新を図ることが重要である。

3 - 5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2015/7/7	居場所プロジェクト	芝の家	湯河原の居場所
2015/7/10	プロジェクト推進の相談	地域診療施設	温泉泥活用試験に向けた打合せ
2015/7/31	居場所作り打ち合わせ	湯河原町教育センター	・ゆがわらっことつくる多世代の居場所プロジェクト の概要説明 ・研究協力のお願ひ（子どもを対照とする場合の進め方の確認等）
2015/8/4	絵屏風・居場所プロジェクト打ち合わせ	慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス	公開セミナーについての打ち合わせ、絵屏風PJ、居場所PJの今後のスケジュール
2015/8/26	絵屏風プロジェクト	湯河原町	ゆがわら絵屏風プロジェクトの遂行について、湯河原町と調整すべき事項の確認。2015年秋学期以降の絵屏風プロジェクトの進め方について。
2015/9/12	居場所プロジェクト	スカイプ	多世代の居場所づくり今後の予定
2015/9/17	居場所プロジェクト	スカイプ	多世代の居場所づくり 拠点視察報告、キーパーソン打ち合わせ進め方
2015/9/18	プロジェクト間の調整	スカイプ	各プロジェクトの進捗報告、研究会とのコラボレーションについて
2015/9/29	絵屏風プロジェクト	スカイプ	絵屏風プロジェクトチラシ内容決定、10月6日授業内容の確認
2015/10/5	絵屏風プロジェクト	スカイプ	準備講座について
2015/10/10	居場所プロジェクト	スカイプ	居場所プロジェクト、キーパーソン会議、企画会議の運営について
2015/10/13	絵屏風プロジェクト	湯河原町役場第二庁舎第一・二・三会議室	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクトについて区長・老人会長への説明をし、理解を得た
2015/10/16	居場所プロジェクト	湯河原町	居場所プロジェクト、キーパーソン会議の進行、広報
2015/10/16	居場所プロジェクト	Retreat works SOYOGI	居場所プロジェクトキーパーソン会議
2015/10/27	学生の巻き込み方等	慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス	学生の巻き込み方等
2015/11/1	プロジェクト企画会議	Retreat works SOYOGI	企画会議
2015/11/1	居場所プロジェクト	Atamista ゲストハウス MARUYA	居場所づくりについて

2015/11/4	プロジェクト企画会議	スカイプ	企画会議の進め方等について
2015/11/4	温泉プロジェクト推進の相談	地域診療施設	温泉泥活用試験の登録に向けた打合せ
2015/11/5	絵屏風プロジェクト	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクトについて区長への説明会
2015/11/12	プロジェクト全体の推進打ち合わせ	湯河原町役場	町長、地域政策課長とPJの推進方法についての打ち合わせ
2015/11/13	居場所プロジェクト	スカイプ	第二回企画会議 進行の確認、建築家との打ち合わせ結果の共有
2015/11/17	居場所プロジェクト	スカイプ	第三回企画会議について
2015/11/28	居場所プロジェクト	湯河原町	企画会議の進め方等について
2015/11/29	居場所プロジェクト	湯河原町	居場所づくりの方法
2015/11/29	居場所プロジェクト	Retreatworks SOYOGI	第三回企画会議
2015/12/1	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について
2015/12/1	絵屏風プロジェクト 居場所プロジェクト	湯河原町	役場との議論の整理
2015/12/1	絵屏風プロジェクト	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について
2015/12/8	居場所プロジェクト	スカイプ	居場所プロジェクト第4回企画会議の進め方等について
2015/12/22	各プロジェクト進捗共有	スカイプ	各プロジェクト進捗共有
2016/1/7	居場所プロジェクト	スカイプ	2月7日のサイトビジット、1月17日の企画会議について
2016/1/17	居場所プロジェクト	河原町	学生打ち合わせ
2016/1/17	居場所プロジェクト	Retreat Works SOYOGI	企画会議の進め方等について
2016/1/19	絵屏風プロジェクト	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について
2016/1/26	居場所設計打ち合わせ	東京都市大学 等々力キャンパス	居場所設計打ち合わせ
2016/1/30	絵屏風プロジェクト	湯河原町	2月7日の聞き取り調査の進行について・倫理申請書の訂正について

2016/1/30	絵屏風プロジェクト	湯河原町立図書館	ふるさと絵屏風で描く湯河原物語の住民向け説明会
2016/2/5	湯河原町行政関係者、区長への27年度事業報告及び28年度事業予定のご説明 今後の進め方についての討議	湯河原町立図書館	湯河原町行政関係者、区長への27年度事業報告及び28年度事業予定のご説明 今後の進め方についての討議
2016/2/7	領域合宿サイトビジット	Retreat Works SOYOGI	領域合宿サイトビジット
2016/2/7	2月23日、24日、3月3日に実施する聞き取り調査のプレ調査	Retreat Works SOYOGI	2月23日、24日、3月3日に実施する聞き取り調査のプレ調査
2016/2/7	2月23日、24日、3月3日の聞き取り調査	SOYOGI	2月23日、24日、3月3日の聞き取り調査
2016/2/10	居場所2-3月ワークショップの進め方	スカイプ	居場所2-3月ワークショップの進め方
2016/2/23	プロジェクト全体会議	あかねホテル	3月5日 町役場での報告会に向けて行政との協業について議論
2016/2/25	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト委員会、アンケートの進め方について
2016/2/27	居場所プロジェクト物件調査	湯河原町	多世代拠点の物件候補についての打ち合わせ
2016/3/5	プロジェクト全体の推進の相談	町立図書館	各地区の区長さんならびに町の関係者にPJ推進について説明し、理解を得た。
2016/3/6	居場所プロジェクト	Retreat Works SOYOGI	企画会議#5
2016/3/13	居場所プロジェクト	Retreat Works SOYOGI	多世代の居場所の計画づくり
2016/3/14	絵屏風プロジェクト	湯河原町役場	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト 曼荼羅づくりイベントについて

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

平成27年度の成果は以下の通り発表を行う予定である。

- 演劇ワークショップの研究結果については、第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（2016年6月東京にて開催）にて発表予定。
- 要介護認定を受け、介護サービスを受給している湯河原町在住の65歳以上高齢者対象の聞き取り式調査結果については、平成27年11月に行われた第74回日本公衆衛生学会総会において口演発表した（1演題）他、現在進行している本調査の途中結果と合わせて平成28年6月に行われる第66回日本病院学会にて口演発表する予定（2演題）。
- 住民基本台帳より無作為抽出した20-79歳の男女2000名を対象とし郵送による自記式質問紙調査「湯河原多世代アンケート」の結果は平成28年度日本プライマリ・ケア連合学会学術大会で発表予定。

以上のほか、多世代関係指標についても解析が終了し次第、公表し、幅広く活用してもらえるように普及を図る計画である。

5. 研究開発実施体制

（1）研究代表者およびその率いるグループ

①渡辺賢治（慶應義塾大学環境情報学部 渡辺賢治）

②実施項目

1. 未病概念の構築と普及
2. 未病チェックシートを用いたライフログアプリ開発
3. 多世代コミュニティ形成のアプリ開発
4. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
5. 未病対策健康講座の開催
6. 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発
7. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

（2）要介護度進展予防の仕組みづくりグループ

①大磯 義一郎（浜松医科大学医学部、教授）

②実施項目

1. 地域の問題点・ニーズの深掘調査 2) 住民の保健ボランティア活動への意識調査ならびに高齢者の生活状況の調査、4) 要介護度と社会的因子・精神的因子との因果関係の調査
2. 脳・身体機能研究拠点の設立と新規評価法の構築
3. 未病対策健康講座の開催
4. 要介護度進展の予測および介入・評価
5. 医療福祉介護機関ネットワークの構築
6. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

(3) 多世代共創コミュニティ形成グループ

①飯盛 義徳（慶應義塾大学総合政策学部、教授）

②実施項目

1. 地域の問題点・ニーズの深掘調査 1) 地域におけるコミュニティの現状調査
2. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
3. 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成
4. 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成
5. 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発
6. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

(4) 住民学び合い活動開発グループ

①井上 真智子（浜松医科大学医学部、教授）

②実施項目

1. 地域の課題調査 1) 地域におけるコミュニティの現状調査。2) 住民の保健ボランティア活動への意識調査ならびに高齢者の生活状況の調査、3) 医療介護福祉連携の課題に関する調査
2. 未病対策健康講座の開催
3. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
4. 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成
5. 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成
6. 医療福祉介護機関ネットワークの構築
7. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

(5) 温泉活用地域活性化グループ

①大和田 瑞乃（(株)アセンダント 代表取締役）

②実施項目

1. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
2. 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発
3. 温泉活用による未病への効能の科学的データ収集と解析
4. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

6. 研究開発実施者

(1) 研究代表者およびその率いるグループ

	氏名	フリガナ	所属	役職（身分）	担当する研究開発実施項目
○	渡辺賢治	ワタナベ ケンジ	慶應義塾大学環境 情報学部	教授	研究全体の総括/未病チェックシートの普及/世代を超えた交流の場の創出
	秋山美紀	アキヤマ ミキ	慶應義塾大学環境 情報学部	准教授	世代を超えた交流の場の創出 /老人会友愛会による健康支援
	大和田瑞乃	オオワダ ミズノ	(株)アセンダント	代表取締役	未病チェックシートを用いた 温泉活用プログラム提案
	伴英美子	バン エミコ	慶應義塾大学政 策・メディア研究 科	特任講師	研究統括補助
	大磯義一郎	オオイソ ギイチロウ	浜松医科大学	教授	老人会友愛会による健康支援
	井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学	教授	健康意識向上の客観評価
	葉山茂一	ハヤマ シゲカズ	漢方デスク	社長	未病チェックシートの開発/ 生活支援アプリの開発

(2) 要介護度進展予防の仕組みづくりグループ

	氏名	フリガナ	所属	役職（身分）	担当する研究開発実施項目
○	大磯義一郎	オオイソ ギイチロウ	浜松医科大学医学 部	医学部	統括/要介護度進展予防の 方法論の構築、評価
	長田勲	オサダ イサオ	湯河原町福祉部	福祉部	地域との調整、アンケート票 の配布、回収
	浅田一彦	アサダ カズヒコ	湯河原町福祉部介 護課	福祉部介護課	地域との調整、アンケート票 の配布、回収
	宮下徹也	ミヤシタ テツヤ	横浜市立大学医学 部	医学部	データ解析
	藤田卓仙	フジタ タカノリ	名古屋大学大学院 経済学研究科	大学院経済学 研究科	データ解析

(3) 多世代共創コミュニティ形成グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職（身分）	担当する研究開発実施項目
○	飯盛義徳	イサガイ ヨシノリ	慶應義塾大学総合 政策学部	教授	コミュニティ形成、居場所づくり
	坂倉杏介	サカクラ キョウスケ	慶應義塾大学グロ ーバルセキュリティ 研究所	講師	コミュニティ形成、居場所づくり
	伴英美子	バン エミコ	慶應義塾大学政 策・メディア研究 科	特任講師	コミュニティ形成、居場所づくり、多世代指標作成
	山田貴子	ヤマダ タカコ	慶應義塾大学政 策・メディア研究 科	特任助教	コミュニティ形成、居場所づくり
	上田洋平	ウエダ ヨウヘイ	滋賀県立大学地域 づくり教育研究セ ンター	研究員	コミュニティ形成、居場所づくり
	井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学地域 家庭医療学講座	教授	コミュニティ形成、多世代指標作成
	内藤善文	ナイトウ ヨシフミ	湯河原町地域政策 課	課長	湯河原町地域活性化推進

(4) 住民学び合い活動開発グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職（身分）	担当する研究開発実施項目
○	井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学地域 家庭医療学講座	教授	統括／調査・教育介入方法論 の構築、評価
	綱分信二	ツナワキ シンジ	菊川市家庭医療セ ンター	指導医	ワークショップ開発
	渡邊奈穂	ワタナベ ナホ	東京慈恵会医科大 学医学部看護学科	助教	ワークショップ開発・調査票 の作成
	青木拓也	アオキ タクヤ	北足立生協診療 所・東京医科歯科 大学大学院医療政 策学修士課程	副所長・修 士院生	調査票の作成・量的データ解 析
	芦野朱	アシノ アカネ	王子生協病院	事務	ワークショップ開発

(5) 温泉活用地域活性化グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
○	大和田瑞乃	オオワダ ミズノ	(株)アセンダント	代表取締役	統括/温泉活用プログラムの構築、評価
	弘田量二	ヒロタ リョウジ	高知大学教育研究部 医療学系連携 医学部門	講師	温泉泥施術における健康測定・分析・評価
	杉森賢司	スギモリ ケンジ	東邦大学医学部生 物学教室	講師	温泉泥施術における健康測定・分析・評価
	松浦一弘	マツウラ カズヒロ	(株)アセンダント	技術開発担当	温泉泥の技術評価 温泉活用プログラムの構築に対する協力
	田口 竜三	タグチ リュウゾウ	(有)田口事務所	代表	温泉活用プログラムの構築に対する協力、お林ウォーキング企画・推進
	平井 宏典	ヒライ ヒロノリ	和光大学 国際経 営学部	講師	真鶴アートの活用助言
	渡辺 賢治	ワタナベ ケンジ	慶應義塾大学環境 情報学部	教授	アプリを活用した地域活性化

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
H28年 3月1日	RISTEX公開シンポジウム「多世代共創による持続可能な地域社会の実現に向けて」	コクヨホール	120名	多世代領域の8プロジェクトの概要を発表した。

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD

なし

(2) ウェブサイト構築

- ・フェイスブック「未病に取り組む多世代共創コミュニティの形成と有効性検証コミュニティ」(公開)

(3) 学会（7-4. 参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施

7 - 3. 論文発表

(1) 査読付き（ 0 件）

- 国内誌（ 0 件）
- 国際誌（ 0 件）

(2) 査読なし（ 0 件）

7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(2) 口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(3) ポスター発表（国内会議 3 件、国際会議 0 件）

- ・寺澤美晴（浜松医科大学） 独居高齢者の生活実態調査とそれに基づく介護・福祉サービスの提案 第74回日本公衆衛生学会総会 長崎ブリックホール 2015年11月5日
- ・光本貴一（浜松医科大学） 介護保険受給者の社会的孤立解決へ向けた介護サービスの模索 第74回日本公衆衛生学会総会 長崎ブリックホール 2015年11月5日
- ・野本清哉（浜松医科大学） 家族との同居の有無及び施設入所とADL、QOLとの関連 第74回日本公衆衛生学会総会 長崎ブリックホール 2015年11月5日

7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（ 5 件）

- ・相豆新聞 平成27年11月13日
- ・神奈川新聞 平成27年11月14日
- ・神静民報 平成27年11月15日
- ・ウェブニュース カナロコ 平成27年11月12日
<http://www.kanaloco.jp/article/133515>
- ・湯河原新聞 平成28年2月2日

(2) 受賞（ 0 件）

(3) その他（ 4 件）

- ・タウンニュース 平成27年10月23日
- ・タウンニュース 平成27年11月20日
- ・広報ゆがわら12月号 平成27年12月1日
- ・FMかながわ報道 平成27年11月11日

7 - 6. 特許出願

(1) 国内出願（ 0 件）